

チンチンイライラさせ
た責任を取れ！

nibiiro

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

世の中にはチンチンを

イライラさせる子が多すぎる！

無自覚なそのドスケベボディに

責任を取らせるべき！

という理由から突発的に

衝動書きしたのがこれです。

ぶっちゃけ自分のチンチンを収めるために書いただけです。

過度な期待はしないで下さい。

感想や使わせてもらいました（意味深）とかあれば書いて貰えると嬉しいです。

ちよつとしたリクエストボックス

https://syosetu.org/?mode=kappa|view&uid=224479

チンイラ掲示板

https://syosetu.org/?mode=kappa|view&uid=224711&uid=257391

目次

ライザのアトリエ	ライザ	①
1		
ライザのアトリエ	ライザ	②
19		
戦姫絶唱シンフォギア	調	①
34		
戦姫絶唱シンフォギア	調	②
55		
ライザのアトリエ	リラ	①
76		
ライザのアトリエ	リラ	②
95		
グランプルーファンタジー	モニカ	

①	グランプルーファンタジー	モニカ	113
②	ライザのアトリエ	クラウディア	133
①	ライザのアトリエ	クラウディア	153
②	ライザのアトリエ	クラウディア	173
①	アズールレーン	ネルソン	195
②	アズールレーン	ネルソン	213
	番外編 after		
③	ライザのアトリエ	ライザ	

ライザのアトリエ ライザ ①

物心がついた子供の頃。

それよりもずっと前から、俺はその子とずっと一緒にいた。

親から聞いた話によれば赤ん坊の頃からの付き合いらしい。

幼馴染、という奴だ。

その後2人幼馴染が増えてみんなで仲良く遊んでいたが、1番長い付き合いその子がいたから楽しかったのだらう。

女の子なのに普通の男の子よりも自由奔放で元気な子、ライザリン・シユタウト。

通称ライザは年月を経て、気が付けば立派な少女へ成長した。

出るところは出て、引っ込むべきところは引っ込んだまごうことなき美少女に俺はいつもイライラしていた。

てゆうか、チンチンがイライラしていた。



「いい加減にしろよライザ……!」

「え?え?」

ある日。

俺はいつも通りライザに半ば強引に連れられ、彼女の部屋へ来た。

また4人で馬鹿なことでもやるんだろうなと思ってたがいつまで経ってもこない2人、レントとタオはどうしたと聞いた。

そしたら……

『あ、2人とも今日はこれないんだって』

いつもと変わらない可愛らしい表情で言いやがった。

さらに……

『お母さんもちよつと遠出してくるって言ってたよ。3日は帰ってこないかな』

それなりに成長した男と女が2人きり。

それがどうゆうことを意味するのかまったくわかっていないようで……

『そうだ!○○、泊まっていつてよ!2人なら退屈しないよきつと!』

ハンマーで頭を殴られたような錯覚に陥った。

ライザの昔から続く男っぽい言動は、見た目の成長とは裏腹に未だ根強い。

意識されてないのはわかってる。

意識してるのは思春期真っ只中の俺だけだ。

(お、落ち着け……。泊まりなんか小さい頃からしてただろうが……)

何とか自分に言い聞かせ、昂ぶりを落ち着かせた。

変なことは気にせずいつも通りに過ごす。

どうせ明日には自分の家に帰れ——

『ちなみにお母さんが帰ってくるまで泊まり！決定！』

『……ハアッ?!!』

その結果がこれ(壁ドン)である。

「いつもいつもイライラさせやがって！」

「ど、どうしたの○○?何で怒ってるの?」

こ、こいつはほんとに……!!

「いいかライザ、よく聞け」

このままでは一生変わらぬ。

そう判断した俺は深呼吸を1つし、意を決した。

「お前は、エロすぎるッ!!!」

「…………ふえ？」

ポカンと間抜けな顔をするライザ。

どうやら言われたことが理解できなかったらしいが、構わず続ける。

「エロいんだよお前は！そんなドスケベボディをいつも晒しやがってえ！」

「ええっ!?ド、ドスケベって……」

よっほど衝撃だったのか、顔を赤らめうるたえる。

自覚がないのはもう仕方ないが、シモに関しての知識はあるようだ。

「そんなムチムチな胸と太ももを惜しげもなく晒しやがってー！」

「す、好きで晒してるんじゃないし！」

「嘘っけえ！」

これはダメだ。

このままじゃダメだ。

これまでの自分の行いを反省させなくてはいけない……………！

「オラー！」

「ひゃっ♡」

右手で胸をおもむろに掴む。

触れた瞬間、服の上でも相当な柔らかさや弾力があるのがわかった。

(なんだ、この、感触はー)

童貞ゆえ、未知の感覚に戸惑いに頭の中を埋め尽くされる。
しかし、それが段々と怒りに変わってゆく。

「こんな……こんな……」

もはや我慢なんて無意味だと悟った。

「こんなおっぱいで平凡とか言ってたんかおのれはあ！」

「あん♡」

両手でしっかりと胸を掴み、揉みしだく。

「んっ♡やつ♡」

むにゅむにゅと自在に形を変える豊満な果実に興奮が止まらない。

「だ、だめ♡だめだつて、ばあ♡」

「知るか！俺がどれほど我慢してきたと思つて……う？」

揉んでいるうちにある違和感を感じ、手が遅くなる。

疑問を解消するべく、俺は恐る恐る口を開いた。

「おいライザ」

「な、なによ♡んあ♡」

「……お前、下着はどうした？」

シン、と静寂が室内を満たす。

「ナ、ナンノコトカナ。ライザワカンナイナ」

「ほお？しらばつくれるのか。……っ！」

「おっ♡」

触つて固さを感じた部分を摘むと、惚けたライザの口から声が漏れた。

「だったらこのコリコリはなんだよオイ。どう考えても乳首だろうが……！」

摘むだけでなく、押し潰したり引っ張ったりを繰り返す。

「んっ♡あ♡ああ♡」

「どおりでいつもより揺れてるなと思った、よ！」

「ひうううう♡」

捻ると一際強い嬌声が出た。

「なあ、まさか下も履いてないってことないよな？」

「ツ!？」

耳元で囁くとビクリとライザの身体が跳ねる。

「これは……間違いない。」

「ちゃんと確かめないとなあ？」

「あっ♡あっ♡」

壁に手をつけていた左手をゆっくりと太ももに這わせる。

トリードマークともいうべきムチムチした美脚に触れてる現実には、勃起していた陰茎が固さを増す。

「手つき、えっただよお……♡」

「今更何言ってるんだか」

手を太ももから上にズラしてゆき、ズボンの隙間から中に突っ込んだ。

「んんっ♡」

じつとりとした湿り気を含んだ割れ目が直接当たる。

予想通り下もつけていなかった。

「わかっちゃいたけどさ。やっぱお前変態だろ」

「うっ♡はっ♡そんなことな、いい♡」

割れ目から入れた指をがむしやらに掻き回す。

優しさなんて欠片もない指遣いにひたすら喘ぎまくる。

「下着つけずに男を煽って、無理矢理触られてこんな濡らしまくってる奴が変態じゃないなら何だっただよ」

「下着、はあ♡全部、ふう♡洗ったから替えがなかった、のお♡」

「そんな時に男と2人きりになる奴があるかあ！」

「お、ッ♡」

強く刺激を与えれば、ビクッと震え野太い声が飛び出た。

イライラは天元突破し、発散するまでは収まりそうもない。

ライザは身体を走る快感で気づいてないかもしれないが、ズボンを突き破る勢いで股間にテントが張っている。

それを、解放する時がきた。

胸に触れてたままの右手でズボンもパンツも脱ぎ捨てる。

赤黒い怒張がポロリと飛び出した。

「っ♡そ、それ……♡」

「自分ばかり気持ち良くなりやがって……。お前のせいでいつもこうなるんだからな。責任とって貰うぞ」

両手でズボンを一気にズリ下げ、露わになった魅惑の三角地帯。

そこへ、亀頭を近づける。

「あっっ♡」

腰を進めるとぶちゆう、と音を立て股間同士がくっついた。

「す……凄すぎ……」

肉棒全体が瑞々しい肉感に包まれ、身じろぐ度に溢れでた愛液と吹き出る先走りに

よって腰が浮く。

「う、動くぞ……っ！」

「んんっ♡」

堪らず、腰をひたすら前後に動かす。

「んっ♡んっ♡ふんっ♡」

お互いに敏感な所を擦り合っているせいか潤滑液はどんどん増え、床に大量のシミを作る。

「はっ♡あんっ♡あっいつ♡おちんちんあっいい♡」

興奮が羞恥を上回り始めたのか、ライザの口から淫語が出始める。

「おまんこっ♡擦れてえ♡ちんちんでおかしくなっちゃうっ♡」

「っ！おっ！」

「ひんっ♡おっぱいもお♡」

服と肌の隙間に手を差し込み、胸も一緒に揉む。

服の上からとは違った直の感触に手が幸せになる。

「おっ♡ほっ♡コリコリだめえ♡乳首だめえ♡」

既にビンビンの乳首を刺激すれば声の艶が高くなり、愛液も溢れる。

「えっちな音お♡出しすぎだよお♡はああ♡」

腰が加速して放つ体勢に移る。

ふと、目の前にある卑猥に歪んだ顔を見れば視線が合った。

「ふっ♡はっ♡……んちゅう♡」

身体が勝手に動き、キスをする。

逃げ場のないよう両手を胸から尻へ回して、口内の舌を絡ませた。

「んむっ♡ちゅう♡ちゅむっ♡」

安産型の尻を掴み、唇を貪りながらパチュパチュと腰をぶつける。

「んんむゅ♡ちゅぱっ♡れろれろお♡はむっ♡」

口を僅かに離し、ねっとりと舌同士を絡ませる。

精巢から尿道をのぼってくる感覚が背中を走る。

尻を掴む手に力が強くなり、その時はきた。

「んんーっ♡」

ディープキスをし、くっついたままの射精。

びゅるびゅると射る凄まじい量の精液が太ももと陰部を汚していき、ライザの脚から

みゅちゅっ♡と音を立て溢れ出す。

「んっ♡んっ♡んっ♡」

射精しながらも腰を振り、欲望のまま堪能する。

「んむっ♡……っはふ♡」

やがて射精は止まる。

同時に合わせた唇を離せば、混ざり合った唾液の橋が何本か形成され、ぷつりと切れていった。

「はあ♡す、凄いやお♡これが、男の子の……キャッ！」

余韻に浸るライザの腕を掴み、壁に手をつかせる。

「まだだ……」

突き出されたでかジリを掴み、先程と同じように今度は後ろから秘部を擦るように突き入れた。

「っ♡ま、またするの？」

「当たり前だ。もつとケツと太ももを堪能したいんだよっ！」

再び狂ったように腰を打ちつける。

ハリのある尻の弾力が股間に伝われば、それだけでイッてしまいそうだ。

「ふっ♡あん♡また、おっぱいいいっ♡」

ゆさゆさと揺れる巨乳を絞るように揉む。

悶えるライザの背中に、上体を預けながらのピストン運動。

「あんっ♡ひいっ♡摘まんじゃ♡乳首、弱いつてえ♡」

いつまでも揉んでいたくなる柔らかなさの頂点を愛撫する。
改めて思うが、最高だ。

ライザは最高のドスケベボディだ。

「あゝ、あー！2発、目えーんぐっ！」

「ふうっ♡」

さつき出したものと何ら遜色ない濃厚ザーメンが弾け飛ぶ。

「うっ……………っ……………！」

「はっ……………ふっ……………♡」

小鹿のように脚を震わすライザ。

絶頂が終わるまでその肢体にしがみ付いた状態で固まる。

「はあ……………おうつ」

出し切ったかなと思いだろドロドロのチンコを抜き取ると、残っていた精子がびゅつと吹き出し桃尻に掛かる。

「んあ♡お尻も、白くなっちゃったあ♡」

膝の限界がきたのか、ライザはその場に崩れ落ちる。

とはいえ、いまだに息子さんはピンピンだ。

まだ、終われない。

「ほら、ライザ。こっち向け」

「へっ……っ♡」

壁を向いていた顔がこちらに振り向いた時、チンコが目の前に突きつけられる。

ムワアッとむせ返るような淫臭は俺にまで漂う。

「お前のせいでこんなにドロドロだ。ちゃんと綺麗にしろ」

その言葉を聞き、しばし俺の顔とチンコへ視線をいつたりきたりした後、開かれた口から真つ赤な舌が伸び出た。

「つれろ♡れろれろ♡」

卑猥に蠢くライザの舌が、こびりついたザーメンを舐めとる。

「れろお♡……ちゅっ♡ちゅう♡むちゅ♡」

動いていた舌が引つ込んだと思いきや、突如亀頭にキスを落とされ、先端を丸呑みされた。

「ぢゅっ♡ぢゅっ♡んむゅっ♡ぢゅうううっ♡」

「お、お、おおお！」

「ぢゅっ……ぼん♡ぷはあ♡」

尿道に残っていた精液が一滴残らずバキュームで吸い取られた。

「お、お前……。どこでそんな技を……」

「え、えっと、その、〇〇の家にあった本で……」

マジでか。

「……何冊読んだ？」

「……ぜ、全部」

マジでか（2回目）

「やっぱ変態じゃねーか」

「そ、そんなことな——っ♡」

ライザが反論の言葉を紡ぐ前に、チンポを目の前出せばゴクリと生唾を飲み込む。

そのまま腰を使い、突き出したチンポにしなりを与えて端正な顔にペシペシとぶつける。

「つたく、ガチガチチンポ目の前にして叩かれて喜ぶ奴が変態じゃない？説得力ないなあ」

「っ♡あう♡うんっ♡」

チンポピインタになす術もなく屈する姿は紛うことなく変態の証だ。

「さて、少し疲れたな」

「あっ——」

ライザから離れると寂しげな吐息が聞こえた。

「ん？どうした？」

「な、何でもないよ！」

「……そうか」

俺にはわかる。

ライザの中で眠っていた情欲の炎がまだ燃えているのが。

口では何とでも言えるが、視線が勃起チンポに釘付けだ。

ギシリと部屋のベッドへ腰を下ろし、声をかける。

「じゃあ最後に、胸でしてもらおうかな」

「……………」

しばらく見つめ合ったのち、ライザがゆっくりと近づいてくる。

俺は腰掛けたまま脚を開き、そのスペースへ彼女に膝をつかせた。

「今までイライラさせてごめんなさい。チンチンイライラごめんなさいって気持ちを入れてやれよ？」

「……わかったわよ」

揺れる胸を持ち上げて、双丘の下部分からゆっくりとチンコが挿入される。

「うわっ……………」

「よいっ……………しょ♡」

谷間から顔を出す亀頭。

それ以外の幹はすっぽりと収まり、ふわっとしそれでいてもつちりした柔肌に包まれる。

「ごうかな？……んっ♡しよ♡」

胸に手を添えたまま上下に動かし始めた。

「あ……ああ……」

股間からじんわりと甘い感覚が広がってゆく。

気を抜けば漏らしてしまいそうな、そんな快感。

たかがパイズリと侮るなかれ。

さっきのフェラもそうだが、ライザは初めてのくせにやたらとこちらの弱点を攻めるのが上手いのだ。

俺の隠してた本による知識もあると思うが、実際にやるとなるとまた別の話。

「んっ♡うりゃ♡」

「おうっ！」

パン生地をこねるように左右の乳房が別々の動きをする。

間違いない。

こいつはエッチやセックスに関して天性の才能を秘めている。

(くっそー！なんつー女だ！)

「ほっ♡」

「っー」

掛け声と共にぎゅつと抱きしめる形で乳房が圧迫され、今までにない圧力を喰らう。

「わっ♡うわっ♡」

当然、耐え切れずにあえなく射精。

出した直後とはいえ、あまりにも呆気ない幕引き。

心の片隅でライザに対しての悔しさとパイズリへの心残りが浮かぶが、それは瞬く間に霧散する。

「んむ♡じゅるるう♡」

加えて、言ってもないのに自らパイズリフェラもやり始め、絞り取る雌の動きに腰が浮く。

「じゅぶっ♡じゅぶぶぶぶぶ♡じゅう♡」

「くくくッ！」

言葉も出せない強烈なパイズリバキューム。

地獄のような快楽に神経焼き切れそうだ。

やがて射精は止まり、残りを入念に吸われる。

「~~~~つば♡んんっ♡」

「ハア……ハア……ハア……」

（魂ごと吸われるかと思った……）

ゴキュリと喉を鳴らし嚙下されてゆく精子達。

あれだけ出たザーメンの大半がライザの胃の中に消えていった。

ライザのアトリエ ライザ ②

「ふう、じゃあ今日はこれで終わりだな」

「え？」

「最後について言ったろ？だから終わり。自分の行いが悪いところなるって身にしてみてもわかったろ。冒険に行きたいならしっかり反省して、男を誘惑しないようにしろよな」

ベッドから立ち上がり、雑に脱ぎ捨てたズボンを手に取ろうとしたが――

「……なんだよ」

ライザに後ろから抱きつかれた。

「まだ、してない」

「は？」

「まだ、最後までしてないよ」

「……何言ってるんだ」

ほんとにこいつは、何を言っているのか。

「セックス、してないよ」

「ここまでしてないんだが、セックスしないのはお前のためだ。好きな人を見つけた

らそいつとしろ。反省してるみたいだしこれ以上は——」

「相手ならもういるよ」

「……あ？」

回された腕に力が入る。

背中越しにハッキリとした眩きが聞こえた。

「——○○、好き」

引いていた汗が、浮かび上がる。

「好き。大好き」

これは、夢なのか？

「○○と一緒にいると楽しいの。幸せなの。ずっと、ずっと一緒にいたいよ」

あのライザが、好き？

俺のことを？

「私が○○のお、おちんちんイライラさせてたって聞いた時、ホントは嬉しかった。平凡な私で興奮してくれてるんだって」

「……………」

「本音を言うとな、下着つけなかったのはわざとなんだ。そうすれば○○から手を出してくれるかなって……………」

後ろを振り向けば、俯くライザがいた。

信じられないが、どうやら紛うことなき現実らしい。

「ライザ」

声をかけるとうつむいた顔があげられる。

瞳はゆらゆらと不安がちに揺れていた。

「俺も、好きだ」

揺れた瞳が明るさを取り戻し、開かれる。

「ほ、ほんとに?」

「ああ。小さい頃から気付けば、お前のことを目で追ってた」

「そっかあ……。一緒だ」

どうやら意識されていないのは俺の勘違いだったみたいだ。

両思いだったことがわかり嬉しそうに笑うライザ。

それに釣られ、俺も思わず微笑んでしまう。

「じゃあ……。セックス、できるよね♡」

「ツッ?」

そうだ。

たった今俺はライザに向けて、好きな人としろと言ったじゃないか。

つまりだ。

「えへへ♡○○のおちんちん欲しいな♡」

このムチムチドスケベボディとセックスできる!!？

「まだまだ反省が足りないかもな♡困ったな♡これじゃあ冒険できないな♡」
こちらの顔を見ながらペニスをツンツン指でつつく。

挑発。

ライザは今、好意を寄せる雄と番になれることに浮かれている。

同時に、雌としての本能も表に現れ始めたようだ。

「上等だ」

3 発出して萎えた分身が瞬時にいきり勃つ。

ビキビキと血管を浮かび上がらせ、雌に種付けするシーケンスへ移行を完了した。
右手でライザの腹、子宮があるだろう部分に触れる。

ピクリと反射的な震えをすれば、股間から僅かに液を噴かせた。

「徹底的にわからせてやるよ」

「——♡」

手を介してキュンキュンと蠢く子宮の鼓動。

言葉を交わさず、俺達は着ていた残りの服を脱ぎ捨てた。



「あゝっ♡あうゝ♡っは♡」

部屋の窓とカーテンに鍵も閉めきつた部屋の中。

「ツ♡♡ひづっ♡♡」

うつ伏せで投げ出された四肢を時折動かすライザがひたすら喘ぎ声をあげる。

「ふづっ♡♡おゝづっ♡♡」

「フンッ！」

「あゝひっ♡♡やら♡♡もうやらあゝ♡♡」

「うるっさい！」

寝バツクで上を向いたエロ尻にバチンと股間を打ちつける。

グズグズにほぐれた膣内の奥までイライラチンポが入り込んだ。

「おゝおゝっ♡♡あゝおっ♡♡じぬう♡♡じんじやうよお♡♡」

「何言ってるんだか！わかんねえ、よっ！」

「~~~~~ッ♡♡♡」

結合してから4回目の射精。

子宮に詰まった古い精子を新品に上書きしながら、呻くライザを強制的に黙らせる。

「ザーメンあつい、い♡おにやかあつい、い♡」

可愛い顔をアへらせながら子宮のある腹を中心に身体を震わす。

その姿は正に、チンポのサンドバックである。

「喋るなら！ちゃんと喋れや！オラア！」

「ほぎゆう♡」

突っ込みっぱなしだからか、溢れかえった精液と噴かれる潮でシートがビシヨビシヨになってしまった。

「チンコにくる身体しやがってえ！なんだこのケツはあ！」

「はんっ♡おちりい♡たたいちや♡はあっ♡」

「ケツ叩かれて感じてんじやねえ！」

「んほお、っ♡」

叩いた手で尻を掴みなおし、瞬時に串刺しに。

「あー！また射る！射るぞライザ！」

「ッ♡むりい♡もう♡はいんない♡」

「あつ♡ああ♡っ♡」

「ちやんと！ごめんなさいって！言え！」

「ふっ♡ごめ♡ごめんなつ♡さい、いい♡♡ごめんなしいいい♡」

「よおし！それじゃあご褒美にイライラザーメンくれてやるっ！！」

「ほおおおっ♡」

加速する挿挿でぶるんぶるん揺れる胸がさらに情欲を煽る。

「ありがたく受け取れっ！っぐうー！」

「ほおお♡ほっ♡おんっ♡」

逆る精液が膣の蠢きで子宮へ運ばれてゆく。

まったく衰えない勢いのある射精が、便器に尿をしてくれるような爽快感で放たれた。

「はー、射る！チンイラザーメンジョボジョボだわ〜！」

「ふっ♡ふっ♡……んくっ♡」

「ん？よつとー！」

「っ♡」

口を半開きに開いて余韻に浸るライザを見て腰をグツと動かす。

「あゝ。どこ触ってもムチムチとかほんとドスケベボディだなあ」

「っ♡っ♡っ♡」

「あ、射る」

「ん、ん、っ♡んう、♡」

遠慮のない自然に漏れ出たあったか精子。

好きなように好きなタイミングの射精が出来る優越感。

「……ふう。さあて、ライザ」

「はあっ♡……ひあん♡」

「仕上げにうつるぞ」

これまでのチンイラの日々を思い返す。

目の前の少女で何度我慢し、何回抜いたか。

苦労の日々が続いてたがそれももう終わる。

あと一息でライザは堕ちる。

恋人として、雌として。

チンチンをイライラさせた責任はしっかりとつてもらわなければ。

その報いとして……

「種付けだ。孕む準備をしろ」

「あっ——♡」

雄の種付け宣言に雌は股蔵から潮を吹いて応えた。

「ハアーツ♡ハアーツ♡ハアーツ♡」

繋がったまま正常位になり、上から覆いかぶさる。

仰向けのライザはM字開脚で脚を開き、激しく息づく。

「ハア―……ふっ♡ぐう♡」

ピツタリと子宮口にくっついていていた亀頭を離し、先つちよギリギリまでチンコを抜いてゆく。

「うう♡」

お手上げ状態の両腕をがっちりと掴み、固定する。

逆らえないことを実感した媚びた声が漏れ出た。

「……いぐぞ」

「あっ♡ふはっ♡」

声をかけ腰をゆっくり沈みはじめ……

「フンツツツ!!!」

「イッ♡ツ♡イグウツ♡♡」

一氣に不意打ちで奥までぶち込んだ。

「つぐゆ♡ほあ♡っ♡」

そしてまた、ギリギリまで勃起チンポを抜いてプレス。

「んん♡お♡っ♡おほっ♡」

それを、繰り返す。

「んぎゃっ♡う♡ひっ♡」

正常位による種付けプレス。

確実に精液を子宮に送り込み絶対に妊娠、受精させるための体位。

「あ♡っ♡お♡うっ♡おほっ♡おほう♡」

雌の意思など尊重しない雄側の一方的な支配。

「今までイライラさせた責任！しっかり取れよお！」

「おくっ♡おぐゆう♡ひいい♡」

「挑発しやがって！このメスが！」

「ちんぽっ♡ちんぽおくう♡おくうっ♡」

龟头が奥へ響くたびに潮が噴く。

突き入れるたびにイッてるみたいだ。

「やっ♡だやめ♡いきゆう♡」

重たいダマの特大射精がドブドブ注がれる。

精子が孕み時の子宮へ旅立てば、補うように睪丸が高速で次々と子種を作る。

「おちんちんしゅきい♡あかちゃんつくりゆのお♡」

「ツッ」

そこで枷が完全に外れた。

体重がより陰茎に乗るようにさらに前屈みになり、一心不乱に打ち下ろす。

「孕め。孕め。」

「あゝっ♡あゝっ♡」

先っぽが子宮をくすぐって刺激し、孕み汁が入り口を通ってさらに満たす。

「孕め孕め孕め孕め」

「ほおおおおおおおおッ♡♡♡♡」

ビキリ。

肉棒が今までの人生で最大に膨らんだ。

「ライザッ!!!孕めえっ!!!」

「んおおおおおおおッ♡♡♡♡」

呼吸をするように下の口が蠢いて飲んだり吐いたりを繰り返す。

その光景はあまりにもエロく、勃起になるのは当然だった。

「……………っ♡ああ♡」

虚ろな瞳がこちらを向く。

そして視線は下半身へ移動した。

「○○う……………♡おちんちん……………♡○○う……………♡」

甘えるようなおねだり。

目にハートが浮かんでるようなメスの眼で俺の名前と肉棒を呼ぶ。

「あ……………。イライラしてきた」

俺はまた、ライザへ覆い被さった。

戦姫絶唱シンフォギア 調 ①

目覚ましの音が聞こえる。

「んうー……。んっ」

枕元に置かれた電波時計。

その頭を叩いて黙らせ、浮かび上がった意識を沈めてゆく。

「ぐう……」

再び惰眠を貪ろうとするが――

――ピンポーン、と呼び鈴が鳴らされた。

「……あく、もう」

のそりと身体を起こして、おぼつかない足取りで玄関へと向かう。

呼び鈴がピンポーンともう1度鳴る。

「はいはい、今でますよー」

今日は来客の予定どころか、バイトも大学もない休日だというのに一体何なのだろうか。

(宅配も頼んだ覚えなし……。さては、変な新聞の勧誘とかか)

ドアノブを掴み、扉を開けた。

「新聞は間に合ってまーす……って、あれ？」

開けた先には誰もいなかった。

イタズラかなと思いふと視線を下へおろせば、ピンクのワンピースを着た女の子が額を抑えて蹲っていた。

「あ……」

「……………」

蹲った女の子、月読つくよみ 調しらべはジーツと涙目でこちらを見上げる。

「えーつと……つー！」

「つー！」

すぐさま扉を閉めにかかるが止められてしまう。

「なんでまた来たんだよ！来るなっていっただろうが！」

「そんな事言われても、本部からの監視も兼ねてるから来ざるを得ない」

「それはただの建前だろうが、って力強っ!?!？」

あと数センチで閉まるところだったのに、どんどん扉は開かれてゆく。

小柄で華奢な女の子の力とは思えない。

「いい加減、観念して」

「いい加減にするのはそつちだろお!?？」

虚しい叫び声アパートのある住宅地へ響いた。



「ただいま」

「お邪魔しますの間違いだろ……」

慣れた動きでI Kの部屋へと上がる調は少し進んで居間へと入る。

「……ん。ちゃんと綺麗にしてる」

「しないとお前が怒るからな」

キヨロキヨロと部屋を見回し、汚れを確認される。

(昨日念のため掃除しといてよかった……)

「で?今日は何しにきたんだ?」

調はこう見えて政府の極秘に関係する人間だ。

そんな調と知り合った切っ掛けは何だという……まあ、単なる偶然としか言いようがない。

「いつもと一緒。〇〇がちゃんと生活してるか確認」

「してます。以上。ハイ終わり」

「冷たい……。むう……」

認定特異災害、ノイズ。

それらノイズを含めた、稀に発生する人類の敵を倒すための政府組織で調は働いている。

見た目は小さい女の子でJKにすら見えないこの子が、命をかけて多くの人を救っている。

かくいう俺も、彼女に助けてもらった1人である。

「布団ぐちゃぐちゃ。切ちゃんみたい」

「あの自称常識人と一緒にするなや」

戦いで消耗し、他の仲間や友達と連絡がつかなかった彼女と偶々遭遇しただけの話。

ケガの手当をし、連絡が取れるまで面倒をみた日々が大体3カ月程前。

「洗濯はまだみたいだからするね」

「後でやるからいいつつの」

「ダメ。そう言っただけやらないの知ってるから」

「……よくご存じで」

無事合流した後は、国家秘密のため俺を監視対象にせざるを得ないとめっちゃガタイ

の良い人に言われ、監視役に名乗りを上げたのが調だった。

「花の女子高校生なんだから、休日くらい友達と遊べよ」

「洗濯機借りるね」

「聞けよ」

こんなやり取りもすっかり慣れたものだ。

初めて会った時は無口で引つ込み思案な子だと思っていたのに、慣れてくると意外とアグレッシブで困る。

洗面所に向かった時は調を他所に、俺は寝るために締め切ってたカーテンを開け、窓を網戸にして換気をする。

「お布団干すのもやるから。〇〇は座ってて」

「いや、ここ俺の部屋……」

「座ってて」

「アツハイ」

調は布団を抱えながら備え付けのベランダへ。

その様子を眺めながら、おとなしく座椅子へ座り込む。

(あ、そういうえレポートの提出期限近いんだった)

大学生といえど、やることやつとかないと流石にまずい。

すぐさまカバンの中からPCを取り出して起動する。

「朝ごはんもお昼も食べてないみたいだから作るね」

「いや、そこまでしなくてもテキトーにカップ麺で……」

「……カップ麺も美味しいけど、たまにはちゃんとしたもの食べないと。〇〇は勉強してていいよ」

「……すまん」

「私がやりたいだけだから、気にしないでいいよ」

そう言つて玄関に下ろしてたレジ袋を運び、手頃なキッチンに立つ。

「おさんどん♪おさんどん♪」

(……今日は一段と張り切つてる気がする……)

調は見た目通り基本は大人しく、表情の変化が乏しいけど慣れればそうでもないのがよくわかる。

チラリと視線だけズラせば、紛うことなき美少女が鼻歌を奏でて料理をしている。

(……つて、いかんいかん)

年下のJK。

しかもつるぺたロリに欲情するのは業が深すぎる。

とはいえ——

(何であんなにエロくみえるんだ……!)

——そう。

調は見た目の起伏が乏しいのに、やる事なす事がエロく見えてしまう。

つまり……

(あー！チンイラするわー!)

何なの？何なのあの子？

やる仕草に色気あるし、可愛いし、貧乳なのにえつちだし、可愛いし、今日の服から覗く脇とか脚とかもー!

(俺、ロリ趣味は無かったはずなのに……)

出会ってからしばらくして、気づけば彼女のことから頭から離れなくなっていた。

やっぱ理想のタイプはボンツキュッボンだろか思ってたのに、現実はこの有様だ。

所詮は経験のない童貞。

考えが愚直すぎた。

「飯できたよ」

「あ、おう。サンキュー」

机の上を片付け、2人並んで座る。

『いただきます』



「ごちそうさま」

「お粗末さまでした。美味しかった?」

「おう。いつも通り美味かった」

「なら良かった」

可愛い笑顔を浮かべた表情にドキつとする。

ほんと、心臓とチンチンに悪い。

それから俺がレポートに手をつけてる間、食器を片付け、洗濯物も干し終わった調はまた隣に座り、内心ドキマガシしてる俺に気づかず口を開いた。

「ねえ、○○○」

「………何だよ」

「この間、ショッピングモールのカフェで女の人達といたよね?」

何で知ってるんだ。

「き、気のせいだろ」

「そんなはずはない。だって、一緒にいた人達ってマリアとクリス先輩でしょ？」

「っ!?」

「っ、っ、っ……！」

知っててわざと遠回しに……！

「2人と何してたの？」

「そ、それは、その……」

言えない。

調との関係を根掘り葉掘り聞かれたなんて。

ましてやあの2人に……

『あたしの大事な可愛い後輩を泣かせてみる。ただじゃおかねえぞ』

『調を悲しませたら、どうなるかわかってるわよね』

何てことを言われてしまった。

加えて、その他の人達にも。

『調ちゃん、すっごくいい子だから大事にしてあげてください！』

『月読は私達の大切な仲間であり友なのだ。彼女を傷つけた時は、防人として刃を振る

わせてもらおう』

『……デース』

もうどうしたらいいかわかなくなってきた（本音）

最後に至っては無かったことにしたい。

だって突然現れては威嚇されるし、しばらくストーキングされるし……。

「言えないようなことなんだ」

「いや、まあ、そうなんだけど。別にそんな大したことじゃ……」

「2人とも○○が持つてる本みたいにスタイル良いもんね。仲良くしたいよね」

「な、何でそれを……」

バカな。

調がここにくるようになってから絶対に見つからないようにしてたのに。

「別に下心とかないから！そうゆうのじゃないから！」

「じゃあどうなの？」

「そ、それは……」

ジリジリと四つん這いでにじり寄る調に対し後ずさるが、1K6畳部屋ゆえに、背中
はすぐにガラス張りの大窓にくっ付いた。

（近い近い近い！）

若干不機嫌味のある顔といい匂いがゆっくりと近づいてくる。

「やっぱり言えないことなんだ」

「っ！」

そこで俺は見た。

見てしまった。

(ブラがっ!? 純白のブラが見えっ!??)

ワンピースを着てるからか、前屈みで迫る調の胸元から真っ白な下着が鮮明に映る。

「えい♡」

「はうっ！」

下着に目を奪われていると、突如股間から刺激が走った。

「おまつ……何し、て……!」

見れば、調が自らの両手で俺の股間を弄っていた。

「○○が言ってくれないなら、○○のちんちんに聞く♡」

ルパンも真っ青な鮮やかな手口で、虚しくも我が息子さんは社会の窓から取り出された。

「わっ♡すっ♡い♡もうこんなにおつきい♡」

完全勃起した陰茎をマジマジと見つめられる。

え？何でも勃起してるかって？

……聞くな。

「ちよっ！調、さすがにこれはやめ、うっ！」

ペロリと舌で舐められた。

「……ちよっとしよっばい♡でも、嫌いじゃない♡つれろ♡」

根本を両手で持ちながら、小さい舌で先っぽを舐められる。

「れろ♡れろん♡」

ザラリとした舌の感触が敏感な逸物を襲う。

「んれっ♡……ちゅ♡」

不意に、舐めからキスへと変わる。

「ちゅっ♡んちゅっ♡ちゅ♡」

「おっ！」

愛おしそうな顔でチンコへキスを降らせる調。

何秒間かそれが続き……。

「ちゅ♡ちゅむうう♡」

「おっ！」

亀頭にキスしたまま丸々飲み込まれた。

「んむっ♡も(も)♡」

小さな口で飲み込んだまま、口内で舌が縦横無尽に動きまわる。

「んんっ♡っ♡っ♡ぷはあ♡」

ムワア……っつと大量の唾液と先走りが糸を引きながらチンコが口から吐き出された。

「おちんちんぴくぴく♡可愛い♡……あむ♡」

「ああっ!」

今度は両手を俺の太ももに添え、啜えながら根本まで顔が押し進む。

「んんうっ♡じゆるう♡」

先が喉奥と思われる部分に当たると、今度は吸いつきながら引つ張られる感覚が。

「むっ♡じゆうっ♡んんっ♡んじゅっ♡」

顔を前後に動かしながら、根本まで飲み込むフェラチオ。

童貞の俺には、感覚的にも視覚的にも刺激が強すぎる。

「っあ!うく……!」

「じゆるじゆるじゆる♡じゅぼお♡」

「ふっ……何だよ、その顔お……!」

「こちらを見上げるつぶらな瞳は淫猥に歪み、まるで喜びながら奉仕をしているかのようだ。」

その光景で、理性の糸はついに切れた。

「こ、のおー！」

「んじゅんっ♡」

両手で調の頭をガッチリ掴んで、強制的に奥まで啜えこませる。

「フンツッ！フンツッ！フンツッ！」

「んごっ♡んごっ♡んごっ♡」

「そんなに！気に入っただんなら！たっぶりくれてやる！」

「んごぶう♡」

年端もいかなような見た目の美少女に、遠慮のないイマラチオを繰り出す。

「つむごっ♡んっ♡んっ♡」

喉奥を亀頭が叩く度、2人して身体を震わす。

「んんごっ♡んごっ♡」

挿挿が加速し、精液が飛び出そうと駆け上がってくる。

「おっー！」

我慢の2文字はなんか頭に無く、遠慮なく調へと流し込まれた。

「んんごっ♡んごぶううううっ♡」

ドボりと重たい音と一緒の射精。

一息で発射された子種は口から零れ、溢れでる。

「んっ♡んっ♡」

それに気づいてるのか、勿体無いと言わんばかりに調は飲み込み始めた。

「んぐっ♡つぐ♡つん♡」

しばらく続き、射精の勢いが落ち始める。

それでも、微かに出続けるザー汁を喉へと流し込んでゆく。

「ぎゅっ♡ぎゅっ♡ぎゅっ♡」

「調っ！調っ！はあっ……！」

「はむっ♡ぢゅうううう♡」

打ち止めを感じとったのか根本まで啜え直し、バキュームで尿道にこびりついた残りを搾り取る。

「ぢゅるうううっ♡……ちゅぼん♡」

「っふ……」

1人でする自慰行為とは違う満足感が体を満たし、脱力感が体を蝕む。

イライラをぶちまけたお陰で、分身は萎えはじめた。

「し、調……」

「はあっ……♡」

口周りをベタベタにしながらも歓喜と快感で恍惚の表情を浮かべる。

その姿は、まさに淫魔。

「どうだった？ 気持ち良かった？」

「あ、当たり前だろ……はあ……」

「良かった。〇〇のために色んなオモチャで練習したから」

「……は？」

信じがたい言葉が聞こえた気がした。

「こいつ今何て言った？」

「練、習？」

「うん」

「な、何で？」

「……言わないと、わからない？」

視線を交わし、真っ直ぐに見つめ合う。

俺は換気していた窓とカーテンを即座に閉めた。

「……脱げよ」

「……うん♡」

自らの手でワンピースを脱ぎ、調の下着姿が露わになる。

上はさつき見た通りの汚れなき白。
下も同じような白のパンティーだ。

「ゴクツ…」

あまりにも背德的すぎる光景。

萎えていた逸物が徐々に持ち上がり始めた。

「あっ♡」

調がそれを見て嬉しそうな反応を示し、手を背中へとまわした。

そして、ブラが外されて桃色の乳頭まで丸見えに。

「ん…♡」

続けて下にも手をかけ、こちらの劣情を煽るようにゆっくりと脱いでゆく。

足先を通ったショーツがべちゃりと、水分をたつぷりと含んだ音をたて床へ落ちる。

「ハアツ…ハアツ…調…」

「ふっ♡…んっ♡ちゅっ♡」

お互いの身体を正面から抱きすくめ、キスをする。

「ちゅう♡んはっ♡」

嚥下した精液の味や匂い何てどうでもいい。

今はただこの子を俺のものにしたい。

「んっ♡ちゅばあ♡」

舌を絡めながら、調の全身を愛撫する。
俺のものだ。

この愛らしい顔も。

「んんっ♡」

慎ましい胸も。

「っはあ♡」

小ぶりで柔らかいお尻も。

「あんっ♡」

発情しきって濡れたマンコも。

「あ、っ♡ひゅっ♡」

全部俺のものだ。

「んちゅう♡んれえ♡ちゅっ♡ちゅむ♡」

そそり立つ陰茎に小さな手が纏わりつき、蠢く。

「ちゅっば♡ちんちん、またおつきくなつた♡」

亀頭から根本までを右手でシゴき、左手は睾丸へと触れる。

「っはっはっ♡っはっはっ♡」

身体をゼロ距離で密着したままの甘い囁きボイス。

「しっこしっこ♡たまたまころころ♡」

脳に響く甘美な声と快感に、グツグツとマグマがまた形成される。

「ぴゅっぴゅっ♡ぴゅっぴゅっ♡」

少しでも雄としての立場を教えるために、噴き出そうな快感を必死に噛み殺す。

「我慢してる○○可愛い♡」

舐め腐った態度を見せながら、右手にもったソレを自分の胸へと近づけ……。

「んっ♡」

「っー」

亀頭を乳首に擦りつけた。

「ふふっ♡あん♡」

真つ赤に熟れた先つぼが、コリつとした感触に接触すれば電流のような感覚が背中を走る。

「おっぱいとおちんちんちゅう♡っは♡」

亀頭の割れ目もぐもぐと乳首を啜えつつ、幹の部分を刺激される。

「おっぱいとちんちんちゅうーするの気持ちいいね♡あっ♡もう、暴れちゃだめ♡」

勃起し硬さを増した部位同士の慰め合いは、腰が抜けそうなほど気持ちが良いすぎる。

稀にぶにと伝わる乳房の柔らかさも極上だ。

「射、るう…。射るう…」

「ん、いいよ♡そのままおっぱいにびゅ〜ってだそうね♡」

手コキの速度が上がリ、タマへは子種を増やしてるかのような揉み方をされる。

「あ、っ！」

びゅつと飛び出す第一射。

それに続いて漏れ出る精子達。

「びゅ〜っ♡びゅ〜っ♡」

「はっ！ぐっうっ！」

「おっぱいに甘えて全部出そうね〜♡」

ピンクの先っぽときめ細やかな肌を白濁に染めてゆく。

腹の底が痛くなりそうなほどの射精量。

「し〜♡し〜♡白いおしっこ気持ちいい〜♡」

甘やかしボイスとお残しを許さないといった手淫によって、やがて打ち止めを迎えた。

「うおっ……」

「んっ♡全身ベトベト♡○○に汚されちゃった♡」

「っ！っ！」

こいつは……！

「一緒にお風呂入ろ♡」

チンコは、まだ萎えない。

「恋人同士のえっち♡恋人お風呂えっち、しよ♡」

否。こんなところで萎えるわけにはいかない。

教えなければならぬ。

雄の力をこの雌に。

支配するのはどちらなのかを。

「……覚悟しろよな」

「っ♡」

交尾を始めるまでのカウントダウンは既に秒読みを始めた。

戦姫絶唱シンフォギア 調 ②

恋人お風呂えつち。

それは、文字通り恋人が風呂でえつちな行為に及ぶことである。

……こんな風に。

「あ、っ♡あ、っ♡やっ♡」

トレードマークの2つに結んでいたツインテール。

それを解き、黒い長髪を揺らす。

「んんっ♡っ♡イクっ♡イクっ♡」

風呂場のマットに置いた椅子へ、腰掛けた俺の膝の上で悶える。

「イ、ッ♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

膣内を掻きまわされ、盛大に絶頂を迎えた。

これで、5回目になる。

「……うっ♡……あうっ♡」

抱きかかえられたまま、ピクピクと痙攣を繰り返す。

「ほら、調。前見ろよ」

「ん♡……ふえ♡……っ♡」

ゆつくりと顔が前方へと動き、止まった。

「あ♡……ああ♡……」

そこにあるのは、鏡。

反射して照らし出されているのは、雄の手によって弄ばれた情けない雌の姿。

胸の先っぽはこれ以上ないくらいに張り詰め、開かれた脚の付け根は愛液などでドロドロに。

膣なんかは蕩け切っており、クパクパと開いたり閉じたりを繰り返していた。

「ほんっにお前は……」

右手を再び、秘部へと近づける。

「ハア♡……ハア♡……ハア♡……ハア♡……」

「何でそんなにえっちなんだよッ!!」

「お♡ひっ♡」

そしてまた、指を突っ込んだ。

「おっ♡イツ♡イクッ♡」

瞬間、中が急激に締まる。

どうやらこれだけでまたイッたようだ。

「どんだけイクんだよ!! ええ!!」

「はっ♡っん♡ん♡」

「ちよつとは我慢しろオラア!!」

「ひゅう♡あ♡あ♡っ♡」

ガクガクとヤバいくらい身体を震わしながら、嬌声を放つ。

浴槽に漂う淫臭が増すばかりだ。

「こんなエロいちっばいしやがってえ!」

「ほっ♡ほっ♡」

いじっている右手とは反対の左手。

調のお腹にまわしていた左手で胸を弄る。

「こんな乳首コリコリさせて!」

「っ♡っ♡ほんっ♡」

「チンチンに悪いなあ! もう!」

「んゝんゝ うううっ♡」

乳頭を親指と人差し指で擦りながら、同時に右手で膣の浅い所を引つ掻き回す。

「んやあ、っ♡おっぱいと♡だめえ♡」

乱れば乱れるほど俺の興奮は成長する。

股間のそれはバツキバキで先走りダラダラだ。

だが、まだ出番ではない。

「さきっぽお♡な、かあっ♡」

快感を身体の動きでどうにか逃がそうとする調。

だが、その姿が逆にクル。

「いいからとつとと、イケ!!」

「う、あ、っ♡」

手の動きを早め、より激しく。

「はおっ♡がまん、しろって♡いったのにいいいつ♡」

「知るか! いいからイケ!!」

「やあ、♡イクウ♡またあ♡」

もう自分でも何を言ってるのかわかんなくなってきた。

疑問すら浮かばず、浮かんでくるのは、ただこの雌へわからせることだけのみ。

「イケエ!!」

「イ、ウ、ッ♡グウ♡」

脚をピンと張り詰めての文句なしの絶頂状態。

「~~~~っ♡~~~~っ~~~~っ~~~~っ♡」

断続的に身体が震えれば股藏から勢いのある潮が噴き、鏡を濡らす。

その光景がまたしても、俺の劣情を煽った。

「~~~~っ♡んっ♡んん♡」

両手で平坦な乳房を揉む。

揉むほどないだろと思うかもしれないが、そんなことはない。

男とは違った甘い感触。

手の平に固い刺激を感じるたびに、分身はピクリと反応する。

調のつるぺたロリボディは、雄の本能を煽る絶妙なつるぺたボディ。

—— いや、つるぺたロリボディ・ザ・ドスケベ、だ!!!

「ああっ♡あうっ♡」

「このエロボディ!最高かよ!」

「む、むねえ♡おっぱいで、イッチャウからあ♡」

感度も半端ない。

どんだけえっちなんだこの子は。

……そんなえっちな子にはもつと反省させる必要がある。

俺は、そろそろ頃合いだと判断した。

「ふうううっ♡うううううっ♡………はえ？」

あと少しでまたイケそうだったところで、手を離す。

間拔けな声が調の口から漏れた。

「な、なんで……どうして……」

「なあ、調。いい加減言ったらどうだ？」

そう言いつつ、イキリ立った怒張を調のアソコへ擦り付ける。

「ひうっ♡」

「ソコはもうグズグズだぞ？ホントに胸でイッチャつていいのか？」

「ふっ♡んふ♡」

幹の部分で割れ目をゆっくりと擦る。

グチヨグチヨと粘性の音が大きく聞こえる。

「調の大好きなコレ。もうパンパンなんだよなあ……」

「はっ♡……っ♡……」

息遣いが粗くなってゆく。

そして、ぼそりとした眩きが聞こえた。

「……ちんちん♡」

「ん？」

「……ちんちんでえ♡♡♡イキたい♡」

蕩け顔でこちらを見上げる瞳。

そこにはハッキリとハートマークが映っている気がした。

「ちんちん♡ちんちん欲しい♡○○のおちんちんでイキたいよお……♡」

「っ！」

逸物の勃起が加速する。

精子がギチギチと睾丸の中で早く出せと言っている。

「……こんなにバッキバキになっちゃったぞ」

「あっ♡すごっ♡チンポすごい♡」

「……責任取って受け止めろよ？」



「ん……♡」

浴槽の手すり部分に手を着き、お尻を突き出す調。

ぷりつとした艶のある小尻はこちらを向き、秘部は今か今かと期待に濡れそぼっている。

「ハアツ……」

「あつ♡あつ♡」

亀頭を割れ目に押し当て、クチユクチユと水音を鳴らす。

「やああ♡あん♡」

もどかしいのか、艶めかしく身じろぎをする調。

吐息と一緒に吐き出される喘ぎが芯に響く。

「はやく♡ちようだあい♡」

こちらを振り向き、尻を揺らしながら誘う調。

完全に発情している。

「……いいんだな？」

「っ♡」

上体を調べと覆いかぶさる形で耳元へ囁く。

「もう、止まらないぞ？」

「ハア♡……ハア♡……」

「壊れるくらい、ぐちゃぐちゃにするぞ？」

「ハアツ♡ハアツ♡ハアツ♡」

「チンチンのイライラ、全部出すからな？」

ガタガタと震える色白で柔らかな肢体。

逸物の先で触れている割れ目からは、洪水のような液が漏れ出る。

「フツ♡フツ♡いい、いい、よ♡」

これから雄に犯される事実には、恐怖と歓喜が入り混じった期待に震える雌。

「○○の気のすむまで、私を、使つて♡」

細い腰へ両手を添える。

「おちんちんで♡ハアツ♡犯し——」

「うん、ッ!!!」

「——あひゆっ♡♡」

不意打ちで、怒張を突き入れた。

「おっ♡おっ♡おっ♡」

ズツポリとチンコを啜えた膣。

噴き出る潮には朱色が混じり、敷いてあるマットへと垂れる。

「はぐっ♡ぎゆうう♡」

膜を破ったせいで痛みがあるのかと思ったが、どうやら違うらしい。

「ちん、ぽお♡気持ち、いい♡」

快感が痛覚を上回っているからか、処女だった証については頭の片隅にもないよう
だ。

だったら、もう宣言通りにするしかない。

「っー」

「んあ♡」

腰を前後に動かす。

「あ♡っ♡んっ♡んっ♡」

小さな身体を気遣わないピストン運動。

精液を吐き出すためだけのピストン運動。

「ん♡ん♡っ♡う♡っ♡お♡お♡っ♡ほおっ♡」

「オオオオオオオツ!!」

「~~~~~♡♡♡♡」

腰を高速で打ち付ける反動で、揺れる玉袋がビタビタとケツに当たる。

「あーっ♡あゝあ♡んぐっ♡」

肉棒全体を包む肉壁は、絶えず締め付けを与えてくる。

「イイ♡ぎゅっ♡ふぐっ♡」

「オツ！」

「あゝあゝ あああゝあゝ あああゝ♡♡♡」

決壊したダムのように、溢れんばかりの子種が子宮へ泳いでゆく。

ドロドロの塊が尿道を通る感覚は病みつきになりそうだ。

「ンッ！ンッ！」

「あゝっ…………♡んゝっ…………♡」

ビチビチ踊る精子達。

両手を腰から腹へ移動させ、下から触れる。

「つぐ♡あついい♡おにやかのおくう♡ほかほかあ♡」

薄い肉付きの腹からは、ほんのりとした熱を感じた。

「…………調え」

「ひゃあ…………♡っお♡」

「まだ、終わりじゃ、ねえぞ！」

「ひっ♡ひぐっ♡ぐん♡」

支えるための手足の力が抜けてゆき、身体がズルズルと落ちてゆく。

「このっ！仕方ねえ、なあ！」

「おひっ♡」

再び腰を掴んで、調の身体を持ち上げた。

「こ、これえ♡体重があ♡あ、あ♡♡」

そう。

俺が調を持ち上げた結果手足は宙に浮き、支えとなるのは俺の両手とチンコのみ。

「チンコの！イライラア！」

「あう、っ♡へうっ♡」

「出し切るまでえええっ！」

「ぐうっ♡うううううううう、う、う、っ♡」

ぶらぶらと投げ出された手足が揺れる。

「ん、いつ♡ん、っ♡あ、っ♡」

すぐさま第2射の体制に入る。

「あー♡あ、っ♡あ、っ♡あ、っ♡」

調の方も、喘ぎがひどくなってきた。

「イクぞ！イクからなあ！」

「あゝあゝ あっ♡」

息子が抜けきる瀬戸際まで引つ張り……。

「んんッ！」

膣奥。子宮の中までいくのかという勢いで入れ……。

「フンッ！」

ザーメンが噴き出る。

「あゝゝゝゝゝゝゝ♡♡♡♡」

既に詰まったザーメンが逆流し、結合部から溢れる。

「ゝゝゝっ♡あゝっ♡」

ゴポゴポと音を出しながら、汗が膣内を行ったり来たり。

「あうう♡ううう♡っ♡」

勢いが無くなってゆく。

それを見計らい、尿道の残りを催促するように膣内が蠢いた。

「うっ。くうっ！」

その動きに応えるかのように、こっちも腰と手が勝手に動く。

「うっ♡……ん♡……」

緩やかな挿挿で残っていたザーメンがゆっくり注がれる。

「っ♡あんっ♡」

「っ！」

「っほお♡」

最後に思いつきり子宮を揺さぶって、ダマを吐き出した。

「お♡おお♡っ♡」

「ハア……ハア……」

これ以上ないくらい自慢できる童貞卒業。

(これが……セックス、なのか……)

「し、調……?」

「……っ♡……っ♡……」

声を掛けても返ってくるのは痙攣のみ。

ちよつと、やりすぎたかもしれない……。

「風呂、浸かるか……」



休憩がてら湯に浸かってのんびりしようと思っていた。

耳に届くはキスの音。

そして、ちやぷちやぷ揺れるお湯の音。

「れろっ♡んれえ♡んはあっ♡」

口内を蹂躪し、絡まる舌。

時折、息継ぎをして再び口吸いをする。

「んっ♡ん♡みゅっ♡」

勿論下の方も忘れない。

「っ♡あっ♡」

「ハアツ……ハアツ……!」

「ん♡ん♡んっ♡あうっ♡どんどん、おつきくう♡」

ストロークが早まり、分身在膈内で膨らむ。

「ちようらい♡赤ちゃんザーメン、ちようだい♡」

「射る……!射るぞ……!」

睾丸から精液が昇ってくる。

ラストスパートだ。

「○○の赤ひゃん♡赤ひゃん孕む♡はりやみたいのお♡」

「っ!っ!っ!」

「あひやつ♡んえつ♡」

もう、限界。

「射るうツ!!」

「うゝゝゝゝゝゝゝゝ♡♡♡」

種付けに特化した子種が調のお腹へ収まってゆく。

「はっ♡へうっ♡あつたかあい……♡」



時間は過ぎ、デジタル時計は16時過ぎを示す。

『ゴクツ……ゴクツ……プハー!』

あれから数回致して、風呂から上がった。

今のは2人仲良く牛乳を飲み干した後の声。

「はーっ!風呂上がりの牛乳は格別だなあ……って、大丈夫か調?」

一杯飲み、お腹をさする調に声を掛ける。

「うん、大丈夫。ちょっとだけ違和感あるけど」

「ならいいけどさ。……やっぱり中の掻き出した方が——」

「それは嫌」

情事の際はその場のノリとかで遠慮なく生でやってしまったが、調はまだJKで政府の役人。

当然男として、恋人として責任は取るが……。

「出して欲しいなら、ピル飲まないから」

「……そのままで」

流石に妊娠はまずい。

俺もバイトはしてるが大学生だし、調も学校と仕事があるから。

何より——

(他の人達の反応が怖すぎる……)

というわけで、ピルを飲む代わりとして、出した精子は掃除せずにそのままにしたいという要望。

今後ゴムを着けるのも禁止。

まあ、ゴムについてはあつた方が安心するが、生でやった感覚が良すぎて俺も抵抗が……。

「ほら、これ」

調が持ってきたカバンから薬錠を取り出す。

「え、それ……」

「うん。念のため持ってきたエルフナインお手製のピル」

「エルフナインって確か……。ああ、あの女の子か」

「そう。あむ……。ゴクツ……」

そう言つて目の前でピルを水で飲み込んだ。

「……ふう。○○の迷惑にはなりたくないからね」

「ありがとな、調」

「えへへ……」

頭を撫でれば嬉しそうに笑う彼女。

ホントに可愛い。

……ホントに可愛い（2回目）

「ところで、いつからピルやめていいの？」

「……当然、先、かな」

「むうーっ」

「そんな可愛くむくれたってすぐには無理だっつの」

撫でていた手をクシヤクシヤと動かす。

「んーっ……。あっ」

「？」

突然、調が声を上げた。

モジモジと脚を動かしている。

「どした？」

「えっと……」

持ってきて着替えたスカートの裾が摘まれる。

「垂れてきちゃった……♡」

風呂上がりは下着をつけたくないと言っていたため、捲り上げて見える恥丘は丸見え。
え。

恥ずかしそうにしながらも、股から垂れる白濁を晒した誘惑。

「……今日、泊まってくか？」

「……うん♡」

さて、明日の講義は午後からだったな。

「ベッド行くぞ」

「うん♡……入れ直してね♡」

レポートも、また今度やるか。

ライザのアトリエ リラ ①

土偶を知ってるだろうか？

そうだ。

あのズングリムツクリした土人形のことだ。

この世界では遺跡などの古い地で稀に見かけるのだ。

僕から見ればさして珍しくも何ともないが、その手の専門家だと違うのだろう。

まあ、それはおいといて本題に入ろう。

『リラ・デイザイアスだ。よろしく頼む』

彼女と出会った時、僕は思ったんだ。

(土偶が服着て喋ってる)

初対面の女性に何を、と思うかもしれない。

そんな人は彼女を是非一目でもいいから見て欲しい。

あんなドスケベチンイラボディにはピッタリだと感じる筈だ。

「ハッ！」

素早い動きからの鉤爪攻撃でモンスターが倒れてゆく。

類稀な戦闘スキルを生かし、迫りくる敵を次々と屠る女戦士。

最後の1体に手を掛け、安全を確認すると鉤爪をしまいこちらに近づいてきた。

「終わったぞ」

「相変わらず強いですねリラさんは」

「当然だ。これくらいできなければやっていけないからな」

ドヤアといい笑みを浮かべる。

組んだ腕に支えられた爆乳が揺れた。

……やっぱ重いのだろうか。

「そんなことより素材を集めよう。早くしないと宿に帰れなくなる」

「ですね。アンペルさんも心配させたくないですし」

流浪の錬金術師、アンペル・フォルマー。

仲間である彼は今ここにおらず、ここから一番近い宿で休んでいる。

前の街から中々の距離を渡ったせいで、疲れが現れたらしい。

そんな彼に変わりもう1人の仲間、リラ・デイザースと共に探索に出掛けることになった。

「んーと……お、あつたあつた」

宿のある街から離れた山地。

人の手によって管理されていない山にはモンスターは勿論、素材も中々多い。

「あとはこれと、これもか」

「全部集まりそうか？」

「ええ、バッチリです。僕の薬にも使えるくらいの余り具合ですよ」

僕は錬金術師でも戦士でもなく、薬師だ。

物心ついた時から薬に興味を持ち、本を読んで調査をする日々を送っている。

薬の用途は様々で、傷を治す薬から滋養強壮薬に肩こり腰痛だったり。

完成品は自分達用と販売用の2つに分ける。

「なら此処まできた甲斐はあつたな。〇〇の薬品は頼りになるからあれば助かるものだ」

販売は旅先で売ったり、地方に郵送したりその都度顧客の要望に合わせるが、個人的にそこは二の次だ。

「……そう言ってもらえると嬉しいです」

今の僕は仲間の為、リラさんの為に作っている気持ちが大半を占める。

その理由は、彼女に惚れているから。

「謙遜する必要はないさ。お前の腕を見込んで旅に誘ったのは私なんだ。もつと胸を張っていいぞ」

日頃から胸張り出してる人が何か言ってる。

「それに、戦闘だつてやろうと思えばできるじゃないか」

「できるつていつても、ドーピングとか発火薬とかその辺ですよ。サポートが関の山です」

「そのサポートに私とアンペルはいつも助けられてるんだ。本当に感謝してる。ありがとう」

ニコリと柔らかい笑みがこちらに向けられると心臓が跳ねる。

惚れた弱みもあるかもしれないが、彼女の容姿はまさしく絶世の美女だ。

大きな胸に引き締まったウエストライン、デカデカとしたお尻にムチムチの脚。どの雄から見ても魅力的なのは当然だ。

そんな彼女と好意を持つ僕が終始2人きり。

そうなると思う？

(チンチンヤバイ。チンチン鎮まれ。チンチンヤバイ。チンチン収まれ)

……こうなるでしょ？

「む、〇〇。これを見てくれ」

「っ……………」

近い。

突き出た胸が触れるか触れないかの瀬戸際の近さだ。

「こんな素材私は見ることがないな。〇〇はどうだ？」

「そ、そうですね……」

こんな感じで、ドギマギとしたやり取りがしばらく続いていると何か頬に触れた。

「冷たっ」

それはヒヤリとした冷たい雫。

「……………降ってきましたね」

「みたいだな。激しくなる前に早く山を下りよう」

必要な素材を手早く回収し、2人で山を下り始める。

とはいえ、ここは宿を取った場所からかなり離れている。

視界も決して良いわけでもないし足場も悪いため、今日中に宿に辿り着けるのかどうか……。

「リラさん、ちよつとこれはまずいかと……」

雨が激しさを増してゆく。

小さかった粒も大きくなってきた。

「そうだな。流石に何処かで身を休めるべきか」

数刻して、山中にポツンと建つ山小屋を見つけた。

「ふう……」

どうやら空き家らしく人はないが、幸い暖炉に毛布とベッドなどの最低限暖をとれそうな物はあった。

小屋の強度も問題なく雨風を凌いでくれている。

「丁度いい場所があつて助かったな」

「そう、ですね……」

「……どうした？何故こつちを見ない」

見れるわけがないでしょう。

あなた今しつとり濡れてエロエロなんですから。

「も、もうちよつとで火が着くんで待つてて下さいね」

「……」

聞こえなかったフリをし、座ったまま暖炉の薪に火をくべる。すると後ろから顔へ両手が添えられた。

「わっ」

そのままグルつと顔が回され……。

「無視をするな」

色が異なる双眸と目が合う。

耳のような銀髪がフリフリ動いてアピールをしている。

「すいません。無視してるわけじゃ——」

「——なら、欲情したか？」

硬直。停止。静止。

何を言われたのか理解できず思考が止まる。

「えーつと……」

「……冗談だ」

「……へ？」

スツと添えられていた手が引つ込んだ。

「すまない。気にしないでくれ」

そう言われてから、やっと状況を理解できた。

リラさんは俺を煽ったのだ。

「っ……………リラさん……………」

「何、んっ!!」

離れようとする彼女の手を取り振り向かせる。

さつきと同じように見つめ合うが、唯一違うのは顔を少し前へ出せばキスが出来てしまふほどの至近距離だということ。

「もし……………」

熱気を含んだ息が零れ落ちる。

「もし、僕が本気にしたらどうするつもりですか?」

「……………」

対して、リラさんから微かな息を飲む音が聞こえた。

どんな表情をしてもついい見惚れてしまうほど端正な美貌。

(ああ、やっぱり僕はこの人が……………)

自分の気持ちを再確認した。

この気持ちを伝えるなら今が絶好のチャンスなのだろう。

(でも……………)

「○○○?」

「っ!」

声を掛けられ我に返る。

「……すいません。気にしないで下さい」

「……そうか」



暖炉の薪が燃えて音を鳴らす。

「……」

あれから気まずい雰囲気が続いている。

光源となる暖炉の前に敷かれた絨毯。

そこへ2人で座っているが、一人分の距離が空いている。

外で振り続ける雨音が何処か遠くに感じる程、この状態が重く感じてしまう。

やっぱり、さっきのことで引かれてしまったのだろうか。

(嫌われたかなあ……)

だとしたら泣ける。

ていうか泣きそう。

「……さっきのことなんだか」

「は、はい……」

「悪かった。急に変な事を言ってしまった」

「いえ、僕の方こそ、その……」

チラリと横目で見やるとパチパチと燃える暖炉を見つめている。

ぼんやりと照らし出される明るさも相まって、醸し出す雰囲気妖艶が混じる。

「だが……あのまま、されてもいいと思った」

「えっ」

「……お前になら、いいと思った」

視線が交差する。

心臓の鼓動が早鐘を打ち、抑えきれない衝動が溢れてくる。

そして、お互いにゆっくりと開いていた距離を縮め……。

「ん……♡」

静かに唇同士が触れ、そつと離す。

「はあ♡……ん♡♡」

もう一度キスを。

今度は少し激しめだが、舌は入れない。

「んっ♡はっ♡」

それでも、リラさんとキスをしたという事実が身体を昂らせてゆく。

「……………これは、良いものだな。互いの気持ちがよくわかる」

舐めかしい手つきで唇に指を滑らせる。

ズキズキと陰茎がズボンの中で勃起を訴えている。

「リラさん……………」

「うあ♡」

向かい合ったまま、我慢できずに彼女の胸を弄った。

「うわ……………」

凄い（語彙力消失）

それしか言えないくらいの見た目通りのポリウム。

服の上からでも伝わる豊満な柔らかさに身体が震える。

「はあ♡そんな、に♡触られ、ると♡」

むにむにと形を変えれば、喘ぎ声が口から吐き出され身体を震わす。

「はっ……………♡」

床に敷かれた絨毯へ優しく押し倒す。

とろんと揺れる瞳に自分の姿が映っていた。

「そ、それは……♡」

一息で下ろしたズボンとパンツ。

中から張り詰めたソレが露わになり、視線が当てられているのがわかる。

「んん……♡」

倒れた彼女の上に跨り、ご丁寧に服が矢印で案内までしてくれてる双丘へと逸物を進めた。

「はぐう……！」

谷間から僅かに亀頭が見えるが、それ以外は圧倒的な大きさに成す術もなく埋まる。

両手で感触も味わいながら擦り付けてゆく。

「フツ♡んうっ♡」

先っぽから出る汁が増し、潤滑液となって拍車をかける。

「あっ♡あつい、な♡はあっ♡」

ピツチり貼りついた黒タイトの感触も癖になりそうだ。

男なら誰しものがつい目で追ってしまっただろう爆乳。

それを今、パイズリに使っている優越感は半端ではない。

「そんな必死で、うっ♡腰を、振って……はっ♡」

上記し、ほんのり桃色に染まる頬。

うっとりとした雌の表情が目にも毒だ。

「震えて、きたな♡」

「ハアツ……ハアツ……!」

「いい、ぞ♡射せ♡好きだけっ♡」

「ウツ!」

胸を掴む手に力が入る。

指が沈み込む柔らかさを堪能しながらの射精。

溢れそうな程の精液が、震える度に放出される。

「ん、あ!」

「……ふう♡」

粘り気が強いのか、はたまた彼女の胸が大きすぎるからか、白濁液は顔を出さない。

ゆっくりと抜かれた熱い棒から空気の冷たさがよくわかる。

亀頭と幹は白い光沢を帯びたままだ。

「まだ、二元気だな♡」

そう言つて2人して立ち上がり、リラさんはタイツの上に着た外套を脱ぎ始めた。

ふんどしと乳バンドという服なのかどうかも怪しいそれをスムーズに外してゆく。

「……その服、そうやって脱ぐんですね」

「慣れれば簡単だぞ？脱ぐのも着るのも、な」

まるで、これからお前も慣れてゆくぞというばかりの言動。

「フフツ♡」

「……っ！」

そして、脱ぎ終わった後に露わになる女体。

黒タイツに包まれた特盛おっぱいに、引けをとらない安産型の尻。

くびれもしっかりと把握できる薄い生地故に、胸の頂点のピンク色が見える。

「下着は、着けてないんですね……」

「あの締め付け具合は動きづらくてどうも好きになれなくてな。それに、無くても身体に影響はない」

「……まあ、見ればわかります」

適度に引き締まった筋肉とムツチリとした脚。

股藏の恥丘から薄っすら蜜が漏れ出している。

「まだ、元気だな♡」

膝立ちに移行し、今だ萎えない息子に手が添えられる。

「はあ……♡あむっ♡」

「うわ……っ！」

間髪入れずに唾えられた。

「じゅ♡じゅる♡じゅるっ♡っぱあ♡」

貪るような激しいフエラ。

「んむう♡じゅぽっ♡じゅろろお♡」

その激しさは正に口淫に相応しき行いだ。

リラさんが半獣人だからか、初めての行為にしてはガッツリきてる気が……。

いや、僕も初めてだからよくわかんないけど。

「ずじゅう♡……♡」

「ううーうくっ！」

「……じゅる……ふあっ……♡」

こびり付いたザー汁は綺麗に掃除され、代わりに大量の唾液がコーティングされた。

「これでまた、挟んでやろうか♡」

「っ！」

見事に熟れた果実がチンコの前で揺れる。

タイツに収まった爆乳が正面から近づく。

「ああ、凄いい……」

さつきとは違った下からとは違う縦パイズリ。

ビンビンに暴れる怒張を全方位から包み込まれる。

「どうやら、んっ♡お前はこれが好きなようだ、な♡」

「ああ、やばい。それやばいです……」

ゆっくり身体ごと前後に動き、極上の刺激が与えられる。

「んっ♡んっ♡」

それだけでなく、奥まで突き入れたまま乳房を密着しグリグリ。

「っ♡」

かと思えば、少し身体を引いて浅めに収めたままタプタプと上下に揺らす。

「……………っ……………っ……………」

フェラの刺激も残っているからか、2発目の衝動はすぐそこまで迫っている。

「そらっ♡」

「おおお……………」

横からの圧を強めながらぎゅむう……っと挟み前後に動く。

意識が飛びそうな錯覚に陥る。

「射せ^だ♡射せ^だ♡」

全身がガクガクと震え、チンコからはトプリと精子が一漏れする。

「んっ♡少し漏らしたな♡遠慮せずに、たくさん射せ♡」

こちらの限界を見計らつてか、両手を使い左右の乳房がこねるように蠢いた。
「はあ…………♡」

左右別々の動きと抱擁される強弱の圧が、分身をあちこちから舐ってくる。
情事に浸る彼女の動きも入れて、快樂の波が増してきた。

「リラさん……………！リラ、さん……………！」

「っんあ♡」

放たれる男臭の塊が彼女の乳房に注がれた。

「フツ…………フツ……………！」

「んん…………♡」

吐精に合わせて優しく胸であやされる。

その行為は、言葉は無くとも全部出せと物語っていた。

ヌチャア…………と粘液の音を鳴らして逸物が谷間から抜かれた。

「うっ」

膝が限界を迎える。

思わず絨毯へ尻もちをつき、汗だくのまま仰向けに。

「ゼエ…………ゼエ…………。リラさん、ちよつと休憩を……………！」

休みの提案をしながら、顔だけを持ち上げた視線の先。

そこには、精液濡れのタイツまで脱ぎ去った豊満な裸体が。

「……………んっ♡」

最初とは逆に今度はリラさんが僕へと覆いかぶさる。

「ま、待つて……………！休憩、をお！」

何をするかと思いきや、重力により垂れ下がった巨砲がそそり立つ塔に触れる。

「フフツ♡」

僕の身体の横に手を置き、腕立て伏せの要領で行われる斬新なパイズリ。

「オツ……………！オウツ！」

勃起したそれが丸々と捕食されるだけでなく、股間全体に広がる甘い味わい。

「ハア……………♡ハア……………♡」

果実が潰れて広がるのが心地良く、それでいて恐ろしい。

一応縦ズリではあるだろうが、さっきとは違った魅力を感じる。

「あと、3回だ♡」

リラさんがそう呟くと、宣言通りにゆっくりと……………。

「2……………回……………♡」

「ぐう……………！」

頭の中が白くなってきた。

「これで、最後、だ♡」

かつないほどの幸福な快楽で満たされる。

最早声を出して射精を訴えることはできなかつた。

「っー」

「はあ……♡」

激しさなど微塵もないお漏らし射精。

釣鐘型の美爆乳に吐き出す爽快感は病みつきになる。

「はっ♡……ん♡」

「う、うわ……」

逸物が挟まったまま、ゆっくりと谷間が開かれる。

すると、魅惑の谷間を汚した証のデロリとした白濁が。

「……ハア。雨、止みませんね」

「……夜が明けるまでは、降るだろうな」

敢えて続きをしようとは言わずに、お互いに確かめる。

窓際に置かれたベッドに移るのは時間の問題だった。

ライザのアトリエ リラ ②

「ちゅ♡じゅる♡」

舌を絡める音が鮮明に聞こえる。

「んう♡ちゅっ♡じゅるるっ♡」

いや、絡めるは間違いだ。

正確には貪られているが正しいか。

「ちゅばあ……♡」

「リ、リラさ、んむう……!」

「ん……♡じゅっ♡じゅっ♡」

「ん……。ん……」

舌を吸われ、口内を歯の隅々まで舐めまわされる。

余りに激しいディープキスにより、互いの唾液が繋がった唇から漏れだす。

そして……。

「んむ……っ!」

起立した陰茎に添えられた右手が上下に動き始める。

「ちゅっ♡はあ……♡ちゅう……♡」

微かな息づきをしたと思いきや、またもや口付けを繰り返す。

勿論、舌を吸われながら手コキもされる。

「ちゅじゅっ♡」

ベッドに移動し、仰向けの僕にリラさんのしかかっからこんな感じだ。

ひたすらディープキスと手コキの繰り返し。

しかも、射精寸前のところで動きを止められるという暴挙。

早くも頭の中の理性は何処かへいき、骨抜きにされた僕は射したい欲求しかなかった。

「んれっ♡ちゅむ……♡」

蹂躪する舌の動きに加えて、グチグチと先走りまみれのチンコが刺激される。

密着する肢体の柔らかさもたまらない。

「はあっ♡ふふっ♡辛そうだな♡」

「あ、当たり前、です……。うう……。！」

「先っぽからタマまで煮詰まってるな♡パンパンで苦しそうだ♡」

焦らし焦らされ、脳の神経が焼き切れそうなほどの快楽が全身を駆け巡る。

射精はまだしていないのに、イッてるのではないかと錯覚してしまう。

「ん……こら、暴れるな♡」

獣人ならではの手触りがイキリ立つ分身に伝わる。

浮かぶ血管がドクドクと大きく脈動する。

「また、イキそうだな♡……ふっ♡」

「あぐ……！」

キュツと根元に添えられた薬指と小指に力が加わり、射精経路を閉められる。

そこまでの痛みではないが、単純な痛みとかよりも射せない事の方が遥かに辛い。

彼女は何故こんなことを……？

「何でこんなことを、という顔をしてるな♡ん……♡」

「っ…ま、待って……んー！」

言葉を紡ぐ前に、再び唇で塞がれた。

「んんっ♡れる♡ちゆうっ♡」

気を紛らせるために、震える両手ゆっくり動かしてゆく。

「ちゅ♡……んっ♡」

右手で彼女のお尻へと触れ、左手はくっついた身体の隙間へと差し込んで潰れた乳房を揉む。

「んう……♡」

固い乳首を転がしながら魅惑の爆乳を入念に捏ねる。

「じゅちゅっ♡ちゅっ……んあっ♡」

胸に負けないくらいに柔らかな臀部も堪能し、中指が蜜壺へ接触。

「はあっ♡あっ♡」

ぬるりとした暖かさは、彼女の股座が洪水状態の証とみた。

そのまま指を入れ、挿挿をする。

「んっ♡んぐっ♡こ、この……っ♡」

「ハッ……！」

こちらの反撃に負けじと、リラさんも上下の刺激を激しくしてくる。

「ふうっ♡やめ、うう……やめ♡」

とはいえ、思わぬ反撃に狼狽えたせいも攻めに對して素直な反応だ。

なんとなく察していたが膣の濡れ具合からして、リラさんも結構興奮していたんだらう。

ピンクの乳頭を摘まみ、入れた指を曲げ膣壁を擦る。

「ああっ♡っ♡っ♡」

震え、悶えるその姿が僕の嗜虐心をくすぐる。

初めてで勝手がわからないが、反応を見ながら弄る。

「つぐう♡はっ♡」

身体の震えが増す。

「イツ♡やめっ♡イクツ♡」

「っ！」

「~~~~~♡♡♡」

普段は感じさせないこちらを向いた表情と声に、自然と手つきが彼女の性感を抉り、絶頂させた。

「~~~~~♡あぐっ♡~~~~~♡♡」

見えていた顔が隠れ、僕の胸板へ押し付けられる。

ビクンビクンとした震えが段々と落ちてゆく。

「はあ……♡はあ……♡ま、まさか、あの状態からイカされるとはな……」

「す、すいません……。リ、リラさんにも気持ちよくなってもらいくて、つい」

「そ、そうか。あんっ♡」

手が自然に、たぶたぶと掬い上げるように胸を探る。

「っ♡そ、そんなに私の胸がいいのか♡」

「いいに決まってるじゃないですか。でも、胸以外にもリラさんの全部が僕は好きです

よ」

「や、やめてくれ♡身体の疼きが余計に……っ♡」

息が粗く、蠱惑的なフェロモンが漂い始める。

汗を垂らしながら、彼女は口を開いた。

「そういえば、射精を我慢したのは5回だったか……っ♡」

腕が首に回され、スリスリと全身を擦りつけてくる。

そして、耳元で衝撃の一言。

「……5回も我慢すれば、大量に濃いのが射せるな♡」

「——ッ
！！！！」

この人は、まさか……！

「そんな濃いのを膣内に射されたら、どうなるだろうな♡」

この人は……！この人は……！

「注がれた精子の数だけ、孕んでしまうかもな♡」

みなさーん！！！！この人エロ過ぎますよー！！！！

「ハアツ……ハアツ……。その、ために、ハア……。焦らしを……？」

「ふふっ♡お互いに、準備は万端だな♡」

答えは敢えて言わず、次へと移ろうとする。

本能が叫ぶ。

孕みたがつている雌を犯せと叫ぶ。

耐えられない。

耐えがたい興奮の息遣いと先走りを噴かす逸物を見て、彼女は妖艶な舌なめずりをした。



「んん……♡」

一転し、リラさんがベッドへ仰向けになり、僕がそこへ覆いかぶさる。

スラリとした美脚を掴んでM字開脚にさせた。

「フーツ……！フーツ……！」

心臓が張り裂けそうだ。

単純な運動では味わえない苦しみが新鮮に思う。

「ハアツ♡ううっ……♡そ、そこだっ♡」

龟头を膣の入り口に当てる。

「イ、イキますよ……ハアツ……！」

「……っ♡」

先っぽが滑らかに入り……。

「……あ♡っ♡♡」

そのまま、導かれるように最奥の子宮口を叩いた。

「ぎゅっ♡あう♡う♡」

「あ、あっっ、い……！」

火傷しそうな肉壁の温度。

それを実感した次に来たのは、射精を促す膣壁の蠢き。

「うっ……！っ！っ！っ！」

「ん♡ん♡ん♡っ♡」

精子が睾丸からよじ登ってくるのを感じながら、ピストンで子宮を刺激し排卵を促す。

「あっ♡っん♡い♡はあっ♡」

喘ぎながら、彼女は両手をこちらの腰へ回し密着度を上げてきた。

封が開いたのを皮切りに、彼女が望んでいた精子達が次々と卵子を目指して解き放たれた。

「ふうふううっ♡ひっ♡ひうっ♡」

全身を震わしてびちゃびちゃと汗を子宮へ届ければ、彼女も同様に全身を震わす。

「イツ♡イクツ♡♡」

「つくう！」

刺激に耐えられなかったのか、ほどなくして絶頂と共に脚がピンと張られ、膣がキュウウウつと締まる。

肉棒が自在な動きで包み込まれた。

「ああ、っ♡」

そんなことをされたら当然、射精の勢いは上がる。

「っ♡はっ♡はっ♡」

「~~~~っ！んっ！」

「おほっ♡」

煮つまされたザーメンを全て出し切るために腰を落とす。

「ほっ♡ほおっ♡」

叩き付けた反動を活かし、浮かせ、小刻みの射精ピストンで強烈な快感を共有させる。

「あひっ♡ひいっ♡」

結合部からは既に白濁が垂れだし、あつたであろう破瓜の証は白色で見えない。精液溜まりはどんだん増してゆく。

「やっ♡あっ♡」

そして――

「フウー……!」

――逸物を最大限まで引き抜き――

「……ッあぁ!!!」

――突き込んだ。

「っ♡♡♡」

ドップツン♡♡♡

「~~~~~っ♡♡♡」

内側から聞こえたくぐもった鈍い射精音。

続いて、とんでもない勢いのザーメン達が流れ出る。

「ほくっ♡ほおおおお、お、お♡♡」

普段のクールなリラさんはそこには無く、あるのは雄との交尾で無様な姿を晒す唯の雌。

雌がイキながら声にならない嬌声を上げている。

「あああ、あ、あ、っ♡」

幾許か経って射精の勢いは落ち始めるが、精子が泳ぐ度に彼女は呻く。

「ううっ♡ううっ♡」

さらに数分経過し、打ち止めを迎えた。

そこで身体が本能により揺れ動き、少しでも孕ませる為に奥へ亀頭を押し付ける。

「っ♡っ♡そんな、なにい♡」

「孕、めえ……!」

「くくくっ♡♡♡チンポっ……♡チンポで墮ちるう……♡♡」

さらにそこから時が経ち、とうとう結合が解除された。

「ヒュー……♡♡ヒュー……♡♡」

酷い光景だ。

轢かれたカエルのように肢体を投げ出し、膣からザーメンを吐き出している。

だが、むしろそれが。

「っー！」

僕と、僕の息子を昂らせる。



「おほっ♡おっほお♡」

「っーっー！」

絶えず交わり続けてからどれほど経ったのか。

雨は止み、暗かった外は徐々に白み始めてきている。

そんな中、僕らは日が出てくるのを気にもせず、孕むためだけに勤しんでいた。

「孕めえ……孕めえ……！」

「っ♡まだっ♡んっ♡」

体位を変えず、ひたすら種付けプレスを繰り返す。

「ん♡んい♡っ♡」

「っふー！」

「ああ♡っ♡ま、たあ♡っ♡」

少量でもいいから何が何でも注ぎ込むのを忘れない。

敷いてあったシーツもベッド自体も体液で湿り、部屋は酷い淫臭でいっぱいだ。とはいえ、辞め時がいっこうに見えない。

「もつと♡もつと射せえ♡」

ヤレばヤルほど情事はヒートアップし、構わずセックスをする。

「はあ♡おおう♡イクウツ♡」

何回射したとか最早関係ない。

「また、イツたんですね!!ほんと、リラさんは、エ口過ぎます、よ!」

「そ、そんなことお♡はおおお♡」

「イキながら!オホオホ言つて!恥ずかしくないんですか!!」

「い、言う、なあ♡おひっ♡」

バチユバチユと挿挿が激しく、小刻みに。

彼女の腕を押さえつけ、股間を中心に子宮を抉る。

「ひおっ♡~~~~♡んっ♡むう♡」

うるさい喘ぎを唇で塞ぎ、ペロチューをしながら種付けプレス。

「んっ♡んっ♡」

息継ぎも忘れて必死に舌を絡める。

膨れた睾丸が子種を発射する準備を整えた。

酸素を求めて息をついた直後、残った精子がビュルつと飛び出した。

「ハアツ……ハアツ……。あ、朝になっちゃいますね……」

「そ、そう、だ、な……」

チンコを抜き、2人してベッドへ横になる。

全身がベトベトで気持ち悪い。

「さすがに、ハアツ……。そろそろ町に戻らないと」

「その前に、近くで水浴びをしたい、な……」

横向きで手を繋ぎながら言葉を交わす。

毛布を掛け、お互い風邪をひかないようにする。

「確か、近くに湖がありましたね。少し休んだら行きましょうか」

「ついでに、軽く汗を拭いてからな。……ああ、そうだ」

美貌をこちらに向け、何気なしに彼女は言った。

「水浴びは一緒に……な♡」



—— 3カ月後

下宿した宿で僕たちはいつものように交わっていた。

「も、もう無理です……!」

「ふっ♡今日、は♡私の勝ち、だな♡」

あれから時間があれば事あるごとにセックスしていた。

僕達の関係は山小屋以来恋人に変わり、アンペルさんに伝えると始めは驚いていたが祝福してくれた。

ただまあ、そういうことは程々にねと釘を刺されたが、リラさんがそんなことを聞くはずもなく……。

「んっ♡はあっ♡相変わらず、濃いのがいっぱいだな♡」

こうして搾り取られてしまう。

とはいえ、セックスとはある事情からしばらく控えなくてはならない。

「お、お腹の子は大丈夫ですか?」

「ああ、問題ない。ただ、残念ながら明日以降本番は無理そうだ」

そう。

リラさんは今、妊娠している。

勿論父親は僕で母親はリラさんだ。

山小屋での情事が見事におめでたになり、旅に1人加わることになった。

「そろそろお腹も大きくなり始めますからね。わかつてると思いますが、戦闘もダメで

すからね？」

「わ、わかっている！私はもう母親なんだ。この子の負担になることはしないさ」
妊娠が発覚した時はアンペルさんも喜んでくれた。

戦闘もリラさんの代わりに、最近は僕がどうにか頑張っている。

「それにしても……だいぶ逞しい体つきになってきたな」

「あー……。まあ、あなたとこの子のためですから。僕も頑張りますよ、父親として」
「……………ふふっ」

リラさんも外見だけでなく、柔らかい笑顔を多く見せてくれるようになった。
幸せだ。

この先何があろうと、僕は変わらず彼女を愛するだろう。

「ところで……」
「？」

「実は、今朝から母乳が出るようになったんだが……」

「えっ」

「……………その、の、飲んでみるか？」

「……………いい、いただきます」

グランブルーファンタジー モニカ ①

空へと旅立ち、何度も困難を乗り越えてきた。

頼れる仲間達と一緒に、果てのない青い空を渡る旅。

騎空団としての名も有名になり、色んな依頼がきたりする。

となれば、プライベートの時間は当然減る。

「っ、疲れた……」

依頼以外にも、団員からの頼み事や戦力の強化も忘れずにしなくてはいけないのがまたしんどい。

すっかり日も落ち、騎空艇の自室のベッドへと横になる。

「ふう〜……」

疲労は勿論ある。

だが、今重要なのはそこじゃない。

「……すっごくムラムラする」

団内の女性メンバーが性的過ぎると最近抜いてないせいでチンコの我慢が効かなくなってきた。

なんで女の子達あんなにえっちなの？

サラちゃんは9歳とは思えない色気がムンムンだし。

ナルメアさんはドラフボデイの自覚なしにお姉ちゃんムーブしてくるし。

アルルメイヤは見た目ぶにあなでも大人のお姉さん感が素晴らしいし。

ユエルとソシエは服装がハレンチルックで気になって仕方ないし。

あげればキリが無さすぎる。

「あー、ダメだ。抜かなきゃ寝れん」

いそいそとズボンとパンツを抜いで、ティッシュを枕元に置く。

「……よし」

久方ぶりのオナニー。

今宵のオカズは、昼間に魔物討伐を手伝ってくれたモニカだ。

「ハア、ハア、モニカア……」

低い背丈に大きなおっぱいの持ち主へ思いを馳せる。

制服姿といい、私服も可愛いとかモニモニまじモニモニ。

「モニモニツ、モニモニ好き……！」

ドラフかよと思えるくらいの見た目なのに、ヒューマンなのもそそられる。

「あー、射る。モニカでいっぱい射るぞお……!」

仰向けで一心不乱にシコシコする。

射精がすぐそこまで迫っていたその時――

「団長、いるか?」

「!?!」

突然、部屋の外から声をかけられた。

「この声は……」

「ど、どうしたのモニカ?」

「いやなに、眠れなくてな。散歩ついでに今日の仕事振りについて団長と話そうかと」

「そ、そう……」

何だよ。真面目可愛いだよ。好き。

「えーつと、ちよつと今手が離せないからもう少ししたらじゃダメ?」

「ん、構わないぞ。明日の準備か何かか?」

「そ、そうそう。明日の依頼について考えてて……」

あ、危ない。

このまま流れで1度お帰り頂いて……。

「では、私も手伝おう」

「フアツ!?」

なんでよ!??なんでそうなるん!??

嬉しいけど!嬉しいけど今はヤバイって!

「だ、大丈夫だよ。俺一人でどうにかできるからモニカはゆっくりしてくれれば……」

「……そうはいうがな。最近の貴公が忙しいのはよく知っている。だったら力になりた
いと思うのは当然だろう。少しは私を頼りにしてくれても良いのだぞ?」

してるよお!

現在進行形で頼りにしてるよお!

だからフィニッシュまで頼りにさせて!

チンチンが震えっぱなしなの!

「あ、ありがとね。でも大丈夫だからさ。大丈夫だからもう少ししてから……」

「……なら、貴公の部屋で待つとしよう」

「ウエイ!?」

どうしてそうなる!??

そうはならんやろ!??

「まったく、鍵もせずに仕事に没頭するとは……。入るぞ」

「あ」

しまった。

鍵をするのを忘れていた。

「ものはついだ。やはり私も手伝お……」

ドアを開け、入ってきたモニカが固まる。

『……………』

無言と両者共に微動だにしない静寂の空間の中、俺のチンコだけが震えていた。



「すいませんでした……」

下半身全裸で床に額を擦り付ける由緒正しきDOG E Z Aのポーズ。

「……まあ、その、なんだ。貴公も男だからな、うん。そういう時もあるだろう」

これ以上目撃者を増やさない為に鍵は閉めてある。

怒られると思っていて、以外にも柔らかく対応してくれている。

「だが、私は秩序の騎空団の一員だ。このまま見逃すわけにはいかない」

「れ、連行だけは勘弁を……」

短期間の謹慎や投獄ならマシだが、そうになると俺の忙しさが他の人へと回ってしま
う。

他の団員に迷惑が掛かるは避けたい。

「な、ならばだ。わ、私が処理をしてやろうか？」

「なん、だと……」

「ち、違うぞー！これはあれだ！し、下心があるとかそういうゆうのではなくてだな！このまま
放っておくと他の団員に被害がと思つて！」

アタフタと顔を赤らめながら必死に言い訳をするモニカ。

これは、アレか。

夢にまで見たあのシチュエーションか。

しょうがないから抜いてあげる的なやつか!!!

まさか現実で遭遇する日がくるとは。

「では、お願いしますー！」

「モニイツ!？」

すぐさまベッドへ腰掛け、ピンピンの逸物を曝け出す。

なんでモニカがそこまでしてくれるかはわからないが、絶好のチャンスだ。心ゆくまで堪能したい。

俺は欲望に忠実だぜ！

「モニモニ早く！早く触ってくれ！」

「モ、モニモニ言うな！」

渋々と開いた股の間に収まるモニカ。

美少女が股間の前で膝をついている光景だけでもうお腹いっぱいになりそうだ。

「お、大きい、な……」

ビクンビクンと跳ねるソレにゆっくりと手が伸ばされる。

「……んっ♡」

「おふっ」

スベスベの柔らかい手が添えられる。

自分の手とは違った女性特有の感触に思わず声が漏れる。

「ど、どうすればいいんだ？」

「あつ、やっぱりこうゆうのは初めてなんですな」

「うとううるさいぞ！いいから教えてくれ！」

チンコ挿んだままの照れモニモニ可愛い。

「じゃ、じゃあまずは唾液を垂らして下さい」

「だ、唾液をか……」

口を閉じてモゴモゴした後舌を出す。

「ん、んれっ♡」

トロリと生暖かい液が先っぽから垂らされた。

亀頭をコーティングし、幹を伝い、モニカの手と逸物の隙間に溜まる。

「そ、そしたら上下にシゴいて」

「上下に……。こ、ここうか？」

「うおっ!!?」

根本から先までヌチュリと手が往復した。

「す、すまない!痛かったか!!?」

「い、いや、気持ち良くて声が出ただけなんでそのまま続けて貰って……」

「わ、わかった……」

適度な力加減で握られた手が動く。

「んっ♡」

生々しい音を発しながら、怒張がシゴかれてけば勃起がどんどん強くなる。

「んっ♡はっ♡ど、どうだ?上手くできてるか?」

逸物が睾丸と一緒に膨張と収縮を繰り返す。

発射までの脈動を整えるモーションに入った。

「モニカ……！モニカ……！」

「あつ♡射そうだな♡」

モニカも射精を感じ取ったのか、シコシコする手が激しくなる。

「我慢、するな♡思いきり射精しろ♡」

「ううっ！イクっ！」

一瞬息が詰まるのを感じた直後、尿道から精液が飛び出す。

「うっ♡」

すかさずモニカが両手で先端を覆い、射精を受け止めた。

びゆるびゆると漏れる白濁が、彼女の手を躊躇いなく汚してゆく。

「まだ射る……！射る……！」

「うっ♡うわっ♡」

噴水並の勢いのある射精がモニカの手を打つ。

「んっ♡熱いのが♡」

溢さないように包み込んでくれた両手の隙間から、精子が溢れる。

生臭い匂いが漂ってきた。

「ハアツ、ハアツ、ハアツ……」

「す、凄いな♡これが男性の射精、なのか……♡」

両手を広げれば、大量のザーメンが糸を引いて垂れ落ちる。

噎せ返る匂いを嗅ぎながら頬を染め、モニカは眩いた。

「どうだ？収まったか？」

「お、お陰様で……」

自慰行為とは比べられない程の気持ち良さを感じた。

モニカのお陰で、あれだけ元気だった逸物は役目を果たしたかのように萎えてゆく。

「スツキリした気分で朝を迎えられそうです」

「そ、そうか。それは良かった」

ティッシュで手を拭き、モニカはホツと息をつく。

悲しいが、幸せな時は終わってしまった。

「だ、団長」

「ん、なに？」

「よ、良ければなんだが……。今後射精の手伝いをしてやろうか？」

「……え」

嘘でしょ？

あのモニモニ自らそんなことを言ってくれるなんて。

そんなの……。

そんなの……！

「是非！お願い！します！」

「う、うむ」



「とは言ったがな……」

「うう、サイトコー……！」

次の日、また夜にモニカが様子を見に来た。

ティッシュ片手にオナニーの準備をした時にまたもや鉢合わせし、抜いてくれることに。

「昨日の今日でこんなに勃つとは……。そうゆうものなのか？」

「た、多分……。つぶ！」

あー、いい。

何がいいってあのモニモニが懸命に手コキしてくれるのがもう最高。

本人の自覚はないだろうが、少し胸を強調しながらシゴいてくれるのが絶景だ。

「つくう〜！射る！」

「んんっ♡」



そのまた次の日。

「あ、あー……♡」

昼間にモニカに声をかけ、夜部屋に来てくれるように言っておいた。

手コキよりも早く射精させる方法がある。

ということ……。

「んんっ♡」

「おう……！」

今回はフェラチオをして貰っている。

「んんっ♡んんっ♡」

亀頭を加え、口内で舌を使って舐められる感覚。

初めてのフェラなのに、思ったよりも躊躇いなく舐めてくる。

「ちゅば♡んっ♡れろ♡れろお……♡」

恥じらいが段々と薄くなってきたのか気になるところではあるが、この際どうでもいい。

「ちゅ♡ちゅむ♡じゆるっ♡」

「あ、あー、ヤバイ」

わかってか否か、時折バキュームを混ぜてのストロークで精子を持ってかれそうになる。

「じゅっ♡ちゅじゅっ♡んじゅう……♡」

「モニカ射るよ！射る！」

「んぶうっ♡♡」



しばらくしてとある日。

「む、胸で挟みたいだと!!?」

「お願いします！」

「グ、グヌヌヌ……!!」

手コキとフェラで抜いてもらう日々の中、俺はダメ元でパイズリをお願いした。

「い、いいだろう」

「っ！では早速！」

俺は逸物を露わにし、モニカは騎空団の制服に身を包んシャツを捲る。

「ぜ、全部は見せんからな！」

「オツケーです！むしろそれがいい！」

「……貴公の好みはよくわからんな」

乳首が隠れるギリギリの高さまで捲り、下乳が姿を見せる。

「い、いくぞ……！」

ツプつと亀頭と下乳が接触し、そのまま食われるように挟み込まれた。

「おお……！こ、これがパイズリ……！」

「ぐっ♡あつ、すぎる♡」

ハリのある弾力がチンコ全体を包み込む。

擦つてもいないのに、触れてるだけで射精してしまいそうだ。

「んっ♡ふっ♡」

両手を添え、圧迫しながら上下にズリズリ。

「っん♡んんっ♡」

ヤバい。

想像以上の刺激と破壊力だ。

「モニパイすごっ……！モニパイズリで股間溶けるう……！」

「う、うるさい♡さっさと、射せ♡」

「おあっ!?」

一層強い柔らかい圧に押しつぶされ、思わず吐精をする。

「ふーっ♡ふーっ♡ふーっ♡」

息を荒げながら、射精中もたぶたと乳房を揺らして搾取される。

やがて、射精は止んだが……。

「……何故大きいままなんだ」

「だ、だってモニカのおっぱいが気持ち良すぎて……」

逸物は全く萎えず、震えながらも存在を主張していた。

「……仕方ない♡もう1度してやろう♡」

「マジで？おうっ!?」

この日はモニパイズリで5回シた。



それからしばらくしたある日。

「こ、この格好は流石に恥ずかしいのだが!?!?」

「ウオオオオオツ! モニモニイ!!?」

「んくっ♡」

壁に手を突き、こちらにお尻を突き出す体勢なモニカ。

その後ろから息子を太ももと恥丘の隙間へと差し込む。

「ハアツ! ハアツ!」

「お、落ち着け♡激しく過ぎ、だっ♡」

細いクビレへ両手を回し腰を動かす。

「んっ♡はっ♡」

先走りですり込みが良くなり、モニカの三角地帯を欲望のまま突き進む。

「んんっ♡っ♡」

「モニカア!」

「ひゃう♡」

思わず腰に回していた手を胸へと移動させる。

「モニモニツ! モニモニ好きっ!」

「つあ♡こらあ……♡揉むんじや、あつ♡」

指をフルに使い、おっぱいの大きさと感触を味わいながらの素股。

身体をピッタリとくつつけてるから、モニカの体温と甘い匂いも感じ取れる。

全身の感覚がモニカで染められる。

このヒューマン詐欺ボディはチンチンの天敵だつ!!!

「射るよー！いっぱい射るー！」

「はうっ♡」

おっぱいを揉む手に力が入る。

壁へ押し付けるような形になり、遠慮なく身体を震わす。

「イクぞっ！イクっ！」

「ふあっ♡~~~~♡♡」

一直線に飛び出すザーメンがモニカのスカートの裏から付着する。

「いつ♡はああああ……♡」

次々と黄ばんだ精子が布地に付いて床に落ちる。

射精中もおっぱいをむにむにと揉み続けた。

「はあ………♡はあ………♡」

その後、フェラで綺麗にして貰い、モニパイズリで2回シた。



「んっ♡」

騎空艇のある一室で、女の声が漏れる。

「はっ♡はあっ♡」

自らの乳房をこね回し、恥部へと触れた手で慰める。

「○○○………♡○○○………♡」

同室のもう1人、リーシャを起こさぬように隠れて自慰に浸ってはいるが、バレそう

で危ない背徳感ある行為が彼女をまた、昂らせていた。

「○○○………♡んっ♡」

やがて、身体をビクリと震わす。

声のできるだけ潜め、大きく息をついた。

「ハアーツ………♡ハアーツ………♡」

一連の動作が終わったのち、彼女は気づいた。

足りない、と。

「ちんちん……♡○○のちんちん……♡」

普段結っている解いた金髪が汗で張り付くのを気にもせず、ベッドから降りてフラフラと歩く。

最早日課となつた団長の手伝い。

そのせいで、彼女は女として覚醒した。

「ちんちん入りたい……♡ちんちん欲しい……♡」

自室を出た彼女は火照つた身体を鎮めるため、ある場所へと向かった。

グランブルーファンタジー モニカ ②

「……ん？」

眠りについていた深夜に、部屋がノックされていた音が聞こえ目が覚める。

(こんな時間に誰だろ)

今日はモニカとの日課も終わり、用事のある団員の相手も済んでいたため、何かやり残したことは何もないと思うが……。

ベッドから降りて、ドアに向かう。

「はいは——えっ」

開けた先にいたのは、寝巻きに着替えたモニカだった。

「……フツ♡……フツ♡」

「モ、モニカ? どうしたの?」

微かな荒めな息遣いは聞こえるが、表情は俯いており見て取れない。

両手で自らの衣服をキツく握りしめ、苦しそうに、それでいて何かに耐えるようにしているのがわかった。

「ちよ、大丈夫? もしかしてどこか悪いんじゃない——」

言葉を紡ごうとしたその時、モニカが正面から抱きついてきた。

(え……)

胸板に埋まる頭、腹に潰れる巨峰が潰れて広がる。

モニカという可憐な美少女のボディの感触がジワジワと身体感覚を刺激してゆく。

「モモモ、モニカさん？急に何を……」

「……団、長♡」

「っ!?？」

ゆっくりと顔が上を向く。

その表情は扇情的に頬を染め、涎を垂らし、あからさまに媚びていますと言わんばかりの表情だった。

「ほ、欲しいんだ♡」

「な、何が？」

ゴクリと唾を飲み込む。

「……ちんちん♡団長のちんちんが、欲しいんだ♡」

——おい、嘘だろ。

あのモニカが。

あの、モニカが。

「ハアツ♡ハアツ♡」

秩序の騎空団のモニカが。

普段規律とかに厳しいモニカが。

「団長……♡ちんちんがあ、欲しいい……♡」

俺の息子さんを欲しがりに夜這いだとうおおおお!!??!!??!!??

「……と、とりあえず部屋に入ろうか」

「フーツ♡フーツ♡」



さて。

「モニカ、服を脱いで」

「ま、待ってくれ団長♡わ、私は秩序の騎空団の1人なんだ♡だからまずは「モニカ」っ

♡
「

何かごちやごちやいつているがどうでもいい。

俺は彼女の言葉を遮り、改めて言った。

「服を、脱げ」

「……わ、わかつ、た♡」

身体が震え始めた原因は喜びか、それとも恐怖か。

モニカ本人も恐らくわかっていないだろう。

「……っ♡……っ♡……っ♡……っ♡……」

上下をライトイエローで揃えた下着姿を晒しだす。

そして、ホックが外された。

「お、おおう……！」

「はっ♡」

支えが無くなった爆乳がぷるんと弾み落ち、その柔らかさを視覚で伝えてくる。

先端の汚れなき桃色はツンと勃起、芯の存在を主張していた。

「うう……♡」

続けて下に手をかけ、屈みながら下す。

「ん……♡」

「……………」

股藏から糸を引いてパンツが脚をすり抜ける。

抑えるものが無くなった秘部からは、まるで漏らしたかのような雫が部屋の床を点々と濡らす。

そして、1つの完成された裸の女体が目の前に。

「えつろ……………えつつろ……………」

「ハアっ♡ハアっ♡」

ゆつくりと近づき、彼女の右手を取る。

その手を己の張り詰めた股間へと導いた。

「あっ♡♡、これは♡」

「モニモニのせいでもう限界なんだよねえ…………。どうしてくれるの?」

「ハアっ♡わ、私が責任もって鎮める♡鎮めさせ——ひっ♡」

何の前触れも無しに洪水塗れの蜜壺を触る。

ぷつくりとした肉芽と肉厚な膣。

そこへ触れ、愛撫を施せば雌が喜声を漏らす。

「ひゅあっ♡あっ♡あっ♡」

「こんなドスケベな身体しちゃってさあ」

「いいいい♡♡♡♡♡」

「わかる？今のモニカなっさけない雌になってるよ？」

「やつ♡はっ♡いい、言うな♡言わないでくれえ……♡♡」

秘部をひとしきりいじった次は、生乳へと手をかざす。

「んう♡♡」

モチモチとした肌に指が沈み込み、汗でしつとりと張り付きながらも跳ね返す弾力に心が躍る。

「かあ〜っ！すっご。モニパイ最高だ」

何だかんだ日課となる精処理はしていたが、これまでお互いに遠慮をしていた部分はあつたからこそ、モニカは女として我慢が効かなくなつたと考えている。

別に狙っていたわけではないが、据え膳食わぬはなんとやらだ。

存分に味合わせてもらおう。

「くっ♡先、をお♡いじるなあ♡」

「いや、無理だから。こんなぶりっぷりの乳首して弄らないとかむしろ失礼だから」

「ふっ♡……ああっ♡♡」

パクリとピンクのソレを啜える。

「なに、をっ♡んんっ♡♡」

甘えるように、貪るように吸い付く。

「かつ♡音を、たてっ♡あんっ♡」

しゃぶり、ねぶり、時折り甘噛みをすれば快感満ちた声が耳に届き、一際大きな水滴が彼女の股から床へ落ちる。

「やつ♡やあ♡やだあ♡」

まるで痙攣してるかのように膝が笑い、崩れ落ちそうなところへ拍車をかけた。

「っ♡♡♡っあ♡♡♡」

正面から見て唇はモニカの左乳に吸い付き、右手は空いてる乳房を揉みほぐす。

極め付けは、残った左手の指を膣へ挿入させる。

これぞ、一人で懸命にチントレに励み妄想の果てに身に付けた男の技！

「いつ、ぺんに♡はっ♡むりっ♡むりっ♡」

飽きがない乳首の吸い付きと胸の感触。

自分の手で彼女が喘いでくれているのがまた、堪らなく興奮する。

「くる♡くるっ♡くるう♡」

（イケ、イケ！）

心の中で命じながら、触手を一際強めた。

「イクッ♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

次の瞬間、モニカは立ったまま潮を吹いて絶頂した。

「はぁぁぁ♡あっ♡っ♡うっ♡」

波の如き余韻があるようで、懸命に脚を踏ん張りながらも無様にぷしやりと雌臭い液を噴出する。

「……っ♡」

「おっ♡」

吸い付いた乳首を解放して手も離せば、ぐらりと彼女の身体は傾く。

すんでのところ支えたが完全に朦朧としているせいか、上手く支えきれずにズルズルと下へと落ちてゆく。

「モニカー?」

「……うう♡……ん♡」

「おっ♡ふー!」

こちらの腰へすがるようにしがみついて落ちる中で、モニカはテントを張った部位へ顔を擦り付けた。

「んー♡ん♡ん♡」

甘えるように欲しがり、ファスナーを啜えて社会の窓を開く。

「むんっ♡」

「おう……！」

トランクスという隔てる壁の隙間を舌で探し当て、逸物が姿を晒す。

モニカに負けず劣らずギトギトのチンコが90度近く反り返っていた。

「はむ♡じゅぶ♡じゅる♡」

粘液同士の奏でる音が下品に鳴る。

「じゅぶる♡ちゅぱ♡ちゅぱあ♡」

息子が激しく貪られる。

今まで経験したモニカのパエラで一番苛烈で濃厚だ。

「ちろちろ♡れろお♡じゅむっ♡」

「はっ……おっ……！」

陰毛が顔につくのも気にせず、無我夢中で搾り取ろうとする動きに腰がもってかれる。

一滴残らずザーメンを飲み干そうとする姿勢がありありとわかる。

「射るぞ！モニカ！射すからな！」

「じゅるるう♡ぢゅっば♡ちゅっば♡」

「飲み、込めえ……！」

「んっ っぶゆ♡♡♡」

ダマの白塊が飛び出す。

「お…………おおー！」

快感に震える度、粘着性の高い精子がモニカの口内を蹂躪し喉を通り、彼女の胃へと注がれる。

「んんん…………ん…………ん…………♡♡♡」

息がしづらいからか鼻息を荒めて呼吸を繰り返し、精子を嚙下してゆく。

「んっ っぎゆ♡♡ぎゆ♡♡」

根本までガツポリ啜え込み、懸命に飲みながらもぷるぷると身体を震わしていた。

「ぐぐっ♡ぎゆぐっ♡じゆるじゆう…………♡」

勢いがなくなつたのを悟り、バキュームをしながら睾丸内で跳ねる子種をねだり始めた。

「ぢゅ…………♡♡」

「かつ！ほお〜！」

「ぢゅほ♡ちゅほ♡」

「じゅっ♡……ちゅうううう……♡♡」

「~~~~~……ぼんっ♡♡♡」

吸い付きすぎ（興奮する）。

「♡ひゅー……♡ひゅー……♡♡」

白い涎を垂らしながら、酸素を求めて息づくモニカ。

苦しかったのは明白なのに、尚も恍惚とした女の姿に肉棒が震えた。

「んっ♡んあっ♡♡」

眼前で吐き出された残り汁を顔で受け止め、歓喜する雌。

見たこともない顔色を浮かべ、ペロリと口周りの精子を舐めた。

「……キレイにして」

「……っ♡♡」



お掃除フェラを済ませ、ベッドに移動した俺達。

「フウ！フウ！」

「いつ♡っ♡んんっ♡」

対面座位の体勢ですぐさま突き刺し、上下に動いていた。

「あっ♡やつ♡あっ♡あっ♡」

手と足で降り落ちないように必死でしがみつきの、喘ぐモニカ。

お互いに首筋に顔を埋めキツく抱きしめながら運動しているため、彼女の全身隅々までが接触する。

「あひっ♡はあっ♡」

胸は潰れ、小さな体軀に合わない塔が動く度に膣肉を抉り、進む。

「ああっ♡ひい♡」

腹にうつすらと浮かぶ逸物の形が、くつついた肌越しにわかる。

発情期を迎えた動物の本能を剥き出しで、ひたすら交尾を行う。

「おっ♡き、いいい♡あ、づいいい♡」

「モニカ！モニカ！」

「やああ♡くひっ♡」

すぐそこまでできているのを抑えつつ、発射の体勢に移る。

「うっ♡うっ♡い、くう♡いく、からあ♡」

「俺も！俺も、イクぞ！」

「はあっ♡あっ♡いく♡くるっ♡あゝあゝっ♡」

「孕め!!？」

「ひああああゝあゝあゝあゝっ♡♡♡」

悲鳴じみた嬌声が上がる。

情欲の全てを余すことなくぶつける。

「~~~~~っ♡♡」

抱きついていた手足をジタバタとするが——

「孕め……!」

「あゝう♡」

静かにしてろ、と伝えるように無理矢理押さえつける。

「孕め……孕めえ……!」

「おっ♡……おっ♡……ほっ♡」

次々と卵子を目指す精子達を確実に送るべく、1ミリの隙間もなく子宮口を下から亀

頭で押し潰す。

「んああ、く♡」

暴れていた手足が求めるように抱きつきに変わった。

「~~~~~♡♡」

悶えながらびちゃびちゃと流れ出る精液を受け止めるモニカ。

彼女の意思によるものか膣内は締め付けがきつくなり、チンコ全体を包みながらも子宮口は密着し、離れようとはしない。

「はあ♡はあ♡はあ♡」

「っー」

「ぐ、う♡」

ベッドが大きく軋む。

ゆっくりだがグリグリと奥を突くように腰をグラインドし、勢いのなくなってきた精子でも残らず満たそうと動く。

「うっ♡ぐりぐり♡おほっ♡」

ザーメンが子宮内を叩く音が肌を通して伝わる。

「はっ♡あ♡おく、が♡ん♡ん♡」

蓋をするように分身は膣に入れたまま、抱きついたまま余韻に浸る。

幾ばくかそうしていると、段々と熱に浮かされるような錯覚に蝕まれそうになる。

「モニカ……」

「○○……♡」

顔を下ろし、視線が交差する。

「好き、だ♡」

「っ！」

お互いの心臓が脈を打つ。

「大好きだ♡愛して、る♡」

小さくなっていた本能が揺さぶられる。

——プツツン

「……えっ♡なっ♡なんっ♡」



以下、騎空艇のとある一室の様子

「やめっ♡おっ♡だ、め♡」

「またイク♡イツちやう♡やだ♡やだあ♡」

「とまつ♡とまつれ♡ぎゅっ♡」

「はあっ♡お、おおきくするなあ♡」

「へっ♡うお♡やつ♡」

「~~~~♡♡あっ♡♡」

数分後

「またあ♡射し、すぎ♡おっ♡」

「なん、でえ♡ふう♡ちくびい♡だめえ♡」

「すわないでえ♡きもちよ、くう♡なっちや、うっ♡あっ♡うっ♡」

「あああああ♡ちんちん♡ちんちん♡ちんちんからまたくるう♡」

「んあ♡~~~~♡♡♡」

「あへ♡ん♡ん♡いつ♡」

数時間後

「あっ♡すきい♡っ♡だん、ちよう♡すきい……♡」

「ちゅ♡ちゅっ♡○○すきっ♡すきっ♡」

「おんっ♡うっ♡ああ、くるう♡あついのがあっ♡」

「——ハッ」

ふと、目が覚める。

窓の外を覗けば朝日が昇り始めていた。

「……oh」

「……スウ……スウ」

起き上がった体を他所に、隣を見れば全身ビショ塗れのモニカが寝息を立てている。

ベッドのシーツは乱れ、至る所が湿り、彼女の身体だけでなく自分の身体も体液が混ざり合った異臭や濡れ具合を感じた。

「……んー？」

付着し、乾き始めた液を拭き取っていると、モニカが呻きながらも目を覚ます。

「お、おはよう」

「……っ！お、おは、よう」

丸見えの裸をシーツで隠し、恥ずかしそうにしている。

「どうやら俺と同じく、細かい記憶は無いが情事を存分に致した事は認識しているらしい。」

「えっと、責任は絶対とるから」

「あ、当たり前だ。うう……」

タオルを手渡し、2人そろって身体を拭く。

窓を微かに開けて換気を行なった。

「……○○」

「ん？」

「背中を、拭いて貰えないか？」

「……喜んで」

新品のタオルを新たに用意し、強く擦らないよう丁寧にモニカの背中を拭う。

「痛くない？」

「ああ、むしろ心地が良い」

そうして、緩やかに準備をしてこれまでとは違う1日を迎える。

「こ、今度はいつが良いだろうか」

「……何なら今からでも、あ痛ッ」

「こら。仕事は真面目にやるんだ」

延ばした手をピシヤリと払い、いつもの凜々しい彼女へ戻った。

「さあ、行くぞ。団長！」

晴れやかな花の咲く笑顔と共に差し出された手を取り、俺は今日も空をゆく。

——なお、速攻でみんなにバレてひと騒動があつたりなかつたり。声も抑えず盛つてればそりやバレるよね。

ライザのアトリエ クラウディア ①

「ありがとうございます」

「ドモー」

適当な挨拶をして立ち去り、帰路を辿る。

そんな中で、ヒソヒソと話す声が耳に届く。

「旅商人の娘さんが行方不明って聞いたか？」

「ああ、聞いたぜ。いなくなつて3日は経つみたいじゃねえか」

「会長さんも商売どころじゃないだろう。なんせ一人娘であの見た目だ。人攫いにあつてもおかしくないだろうしな」

「……………」

ひと運動を終えたようなダルさを微かに引きずりながら、俺は街を出て山に入った。「ふうー…………」。評判がいいにしてはイマイチだったなあ」

ボソリと愚痴を零しつつ緑が生い茂る山中を進み、しばらく歩いたところで止まる。尾行者がいらないか、そしてここから先への侵入者と周囲に異常がないかを確かめた。

（…………まあ、何かあつても俺には関係ないし気にするだけ無駄か）

そう。気にするだけ無駄なんだ。

例え襲われようと疑われようと、問題はない。

再び足を進め、さらに山奥へと踏み入れた。

先程よりさらに歩くと開いた場所へと辿り着く。

「ただいま」

目立つ様な見た目ではない小さな家。

この付近に出かけるための仮拠点だ。

中はいつもと変わらず閑散とし、必要最低限のテーブルにイス、台所といった内装。

入り口を潜れば生活のスペースとなる一室。

その隣、奥へと進めば寝室のふた部屋の構造。

「……寝てるのか」

カーテンを締め切った暗い寝室に入ると、愛用のベッドに一人の少女が寝息を立てていた。

長い金髪に整った顔立ち。

先程行方不明になったと騒がれているその人、クラウド・バレンツは衣服を着けずに薄い毛布一枚のみで寝ていた。

「……………」

ゆつくりと彼女へと近づく。

かけられた毛布を少し払えば、形のいい美乳がピンクの先まで晒される。

「んっ……♡」

掌を翳すように包み、揉む。

寝ているのにかかわらず、悶える吐息が彼女の唇から溢れた。

「は♡……んう……♡」

瞬く間に乳首がツンと勃つ。

もつといじって欲しいと言わんばかりに張り詰めたソコをあえて放置し、悶え、眉を

ひそめた顔を覗き込む。

「はあ♡……はあ♡……」

艶やかなリップがのった唇へ優しくキスをする。

「ん♡んん♡」

伸びた舌先が彼女の口内へ侵入し、唾液を絡ませる。

「ちゅ♡ちゅっ♡」

続けて舌同士も絡ませた。

反射的な反応なのか、こちらから触れ合えば応えるように彼女の舌も蠢いてくる。

「んっ♡……んう♡ちゅばあ♡」

舌を引つ込め唇を離す。

細い銀系の橋が微かに架かった。

「ううん……んうん？」

すると、閉じられた瞳が微かに開く。

「どうやら目を覚ましたようだ。」

「おはよう、お嬢様」

「……う……っ!?？」

瞬間、ガバツと起き上がり距離を離される。

顔を赤らめ毛布で身体を隠しベッドの端へと後ずさり、己の身体を確かめた。

「ま、また、アナタは……!」

「悪い悪い。今度からちゃんと起きてる時にするよ」

「ふ、ふざけないで! もういい加減に——っ!」

音もなく、ベッドへ乗り出す。

左手をクラウドディアの顎に添え、微かに上を向かせて視線を合わせた。

「いい加減に、なに？」

毛布を剥ぎ取り、指先を彼女の腹に当てる。

「んっ♡」

人差し指が緩やかに這う。

「……………」

「ねえ?」

「あつ♡」

線を描くように、優しく擦るように動かす。

「俺が悪いんじゃない、君がこんな時間まで無防備で寝てるのがいけないんじゃないかな? そう思わない?」

「そ、それ、はっ♡」

「まあ、仕方ないか。この3日間夜通し乱れまくってたもんね」

臍周りをなぞり、子宮のある部分へと手の平で触れた。

「ふっ♡ふっ♡」

トクトクとした穏やかな鼓動が肌を通して伝わる。

キスをすぐでできるような至近距離故に、頬は染まり、轟惑的な吐息が漏れているのがよくわかる。

「その証が全部、ここに詰まってるのがその証拠」

「あつ♡あつ♡」

触れたまま、グウッと押し込んだ。

「うううう……♡ふうーっ……♡」

「ハハッ」

「はー……♡はー……♡」

「……♡飯にしようか」

寝起きのクラウディアを存分に弄り、満足しながら呆け顔の彼女と共に隣室へと移った。



「一体お前は何者だと聞かれたとして、あえて答えるとすれば魔法使いと答えるだろう。」

「♡ちそうさま」

「……♡ちそうさまでした」

手を軽く振れば、空になった皿やお椀がひとりでに台所へ浮いてゆき、そこに透明人間がいるかのように綺麗に洗われる。

「……ほんと、魔法の腕だけは惚れ惚れします」

「ありがとう。どうせなら他のことに惚れて欲しいんだけど」

カチャカチャと食器が音を奏でる中、俺は自らの手でコーヒーを淹れた。

「はい、どうぞ」

「……………」

「飲まないの？」

ほんのり湯気を立て置かれたカップを、クラウディアは訝しんだ目で見つめたまま、手に取るうとはしない。

「……………また何か、変な物を入れられてるんじゃないかと警戒してるだけよ」

「あれば入れたかもしれないけどねえ。生憎、この前使ったので終わっちゃったから」

その言葉を聞き疑いの視線を向けながらも、恐る恐るカップを手に取り、ひと口飲み始めた。

「お味はいかが？」

「……………美味しいです」

どこか悔しげな表情で感想を述べ、口に合ったのかももうひと口飲んだところで話を振ってきた。

「また、如何わしいお店に行ってきたの？」

「うん。この辺りで一番評判のいいところにね」

そう。

俺は今朝から街へ繰り出し、風俗店へと足を運んでいた。

別に珍しいことでもなく、行きたい時に行くというスタンスなため、ここ最近は何日のように行っている。

「でも、評判が大袈裟なだけだったなあ。一番人気の人を指名したんだけどイマイチ気持ちよくなかった」

「……不潔」

「ん？」

「不潔よ。アナタは何のためにそんなお店に……」

彼女の言葉に耳を傾けながらミルクを手に取り、残り半分のコーヒーへと注いだ。

「そうだな……。単純にセックスがしたいっていう理由と娯楽を求めてるだけ、かな？」

言い終えた後で、1つ思い出した。

「ああ、もうひとつあった」

「……何ですか？」

ミルクが行き渡ったコーヒーで喉を潤し、俺は彼女に笑みを浮かべて告げた。

「君とシタほうがやっぱり気持ちいいんだなっていう確認」

「っ!?？」

途端に、彼女の顔が赤く染まる。

「な、何を……」

「可愛いよ。クラウディア」

「~~~~~っ!」

ガタンと音を立て椅子が倒れる。

彼女が勢いよく立ち上がったせいだ。

「今日で、約束の3日目」

「そうだね」

「約束通り、私が耐えられたらここから出して。フルートも返して」

「……耐えられたら、ね」



事の始まりは3日前。

基本的に人目を避けて旅をしている俺はいつものように仮拠点を構え、近隣の街へ繰り出して買い物や依頼をこなしたり、はたまた風俗店へ行ったりとしていた。

何故1人旅なのかと言われると、人には話せない依頼や禁忌の魔法実験とかをしているからだ。

そんな中、移動に疲れて腰を落ち着けるためここに拠点をかまえたのが5日前。いつも通りの日常を過ごしていると、思わぬ来訪が。

「いやっ！やめて！」

「……あんまりうるさいと無理矢理口を封じるよ？」

「っ！うう……」

軽い気持ちで山の奥地まで踏み込んだらしく、疲れ果てた少女が家の前で倒れていた。

「君、名前は？」

「……クラウディア。クラウディア・バレンツ」

「バレンツか。つてことは最近街にきた商家の娘さんかな」

「……………」

返答はないが間違いないだろう。

あそこの会長さんには見目麗しい一人娘がいるという話を聞いたことがあるし。

椅子から動けず、座らされた彼女と視線を合わせる。

「君が動けないのは俺の束縛魔法。ついでに、大事そうに持っていたフルートは隠蔽魔法で隠してある」

「……魔法、使い」

「うん。自分で言うのもなんだけど腕のたつ方だよ。だからここから出ようとか思わない方がいい」

まあ、出ようとしても彼女限定の遮断結界を貼ってるから意味ないが。

「秘密な事色々してるから見つかっちゃうとまずいんだよね。だから……」

「やつ……んっ……♡」

首筋へと顔を近づける。

「君を、調教する」

パチンと指を一つ鳴らす。

彼女の服が全て消えた。

「っ!? あっ!」

一瞬にして裸を晒し、反射的に隠そうとするも身体は動かない。

「……いいね。予想通り綺麗な肌をしてる」

「(ハ、ハ)の……!」

「君がここから出る条件は一つ。今から3日間、俺の調教に耐えること。見事耐えたらフルートも返すし、ここから出してあげよう」

後ろにまわり、シルクのような手触りの肌へと触れる。

「ふっ……♡」

余計な脂肪がない脚線美をフェザータッチで襲う。

「はぁ♡……♡つ♡はうっ♡」

予想通りというか、こういつたことに慣れてないせいで早くも吐息が溢れている。

「ん♡……♡んっ♡」

「もどかしいかい？」

「べ、別に……♡ん♡この、くらいっ♡」

「新鮮な反応だ。その強がつてる様もそそられるよ」

太ももから脇腹へなぞりあげた。

「ひゃう……♡」

右手をお腹に、左手は脇の近くへ。

「はっ♡はっ♡」

丸を描くように右手を這わせ、左手は五指を踊らせる。

「んう♡」

「……♡気持ちいいかい？」

「っ♡気持ち、っ♡良くなん、かつ♡」

「……♡ふうん？」

首スジへキスをする。

「あつ♡なに、を♡」

しながら、震える胸を両手で揉む。

「っ♡♡」

ビクンと確かな反応を示す。

形のいいモチモチとした美乳を弄ぶ。

「やつ♡ああ♡あつ♡」

快感が身体を蝕み、徐々に女としての昂りを感じ始めた。

太ももをスリスリと合わせ、艶めかしくよじる姿がとても卑猥だ。

「胸が性感帯なのかな？触られて随分と感じてるね」

「ち、が♡ううっ♡」

根本から搾るように揉む。

「うううっ♡はあ……♡」

否定を紡ぐも、説得力はない。

口元からは涎が垂れ、肌はすっかりピンク色に染まっている。

柔らかさを存分に堪能し、手を離す。

「はあ♡……はあ♡……」

胸への愛撫を終わりに見せかけたところで、乳首を摘んだ。

「ひゅっ♡」

甲高い嬌声が上がる。

「んあ♡ああ♡」

コリコリと起立した先を指でシゴく。

「いつ♡いつ♡だめ♡だめ♡」

乳首を擦るように手の平で乳房を揉み解す。

「んうん♡んん♡」

不意に、指で突起を押し込んだ。

「っほ♡ほうっ♡」

ひとしきり揉み終え解放し、彼女に見えるように両手の指を乳首の近くへ寄せる。

「ふーっ♡ふーっ♡」

ピン、と弾く。

「あっ♡」

「……………」

「あっ♡あっ♡あっ♡あっ♡」

1回だけでは済まさず、何回も何回も、敏感な先っぽを責める。

「ひっ♡ひい♡っ、やあ♡」

面白いくらいに身体を震わし、逃れるように上体を前に倒そうとするがそれは許さな
い。

「んくっ♡~~~~っ♡」

捻るように摘めば、背筋が一気に伸びた。

続けて、先程よりも早く連続で乳頭を弾いて刺激する。

「~~~~っ♡♡いあっ♡くる♡きちやう♡」

「……いいよ」

「やだっ♡やだやだっ♡い、やあ……っ♡」

「乳首でだらしなく——イケ」

耳元で囁くと同時、今までの中で1番の強さで潰しながら捻り、引っ張った。

「イツ♡♡クツ♡♡イクツ♡♡」

「~~~~っ♡~~~~っあ♡♡」

電流が走り、感電したかのように彼女の身体が跳ねる。

「~~~~っ♡~~~~っあ♡♡」

ビクンビクンと痙攣し絶頂の波が終えた頃、顔を覗きこむと酷い表情となっていた。

「うー……♡んー……♡」

ぼんやりとした翡翠の瞳から涙を流し、髪は乱れ、四肢はだらしなく投げ出されてい
る。

あれだけ品があつた少女の痴態に当てられせいで、股間が疼く。

ズボンをパンツごとズラし肉棒を露出させると、彼女の視線が注がれた。

「ほら、舐めてよ」

「な、舐め、る……?」

「そう。齒はたてずに、ね」

口元へ突きつける。

「舐めろ。クラウディア」

「っ！はむ♡」

命令されたからかはたまた恐怖からか、一言を聞き入れた瞬間に躊躇いなく口へ含ん
だ。

「ぢゅ♡ぢゅじゅ♡じゅるっ♡ぷはっ♡んぐう♡」

小さく息継ぎをし、また、フエラをする。

「ちゅぱっ♡れろ♡れろん♡ちゅっ♡ちゅっ♡」

「……いいよ。その調子だ」

「んん、む♡んじゅう♡」

自ら喉奥へと亀頭を押し当て、鼻の穴を広げ、吸い付き、口を窄ませながら奉仕をする。

「……もういいよ」

「じゅっぽ♡じゅっぽ♡じゅっ……ぽお♡」

ネトリとした逸物が彼女の口内から姿を現す。

激しく興奮している彼女を他所に、俺はチンコを彼女の顔へと向けた。

「射る……」

「んっ♡」

生臭い精子が端正な顔立ちを撃つ。

それだけでなく胸や腹、脚といった身体のパーツの一つ一つを丁寧に汚してゆく。

「つく……！ふう……」

「……っ♡……っ♡……」

立ち込める淫臭。

ドロドロのザーメンを浴びながらも瞳は真っ直ぐとイキリ立ち続ける分身を見据えていた。

「……さて」

「……う……あう♡」

「挿れるぞ」

両脚を掴みあげ、既にびしょ濡れの秘部を丸見えにする。

亀頭の先を埋め、腰を進めた。

「んっ♡いあっ♡」

純血の証だったものが結合部から垂れる。

念の為、痛みを軽減する魔法をかけた。

「ううくっ♡お、くう♡」

ミチミチと収縮する膣内を前後に往復し、奥に構えた子宮口を求めた。

「うっ♡おっ♡」

「さっきの残り、捨てさせてね」

「ひぐっ♡うう♡」

反り返った逸物が、入り口から子宮口までの膣道を上に抉る。

「っ♡っ♡っ♡ほおっ♡」

結合部に隙間がないように密着したまま、彼女を気遣いもせず、容赦なく射精した。

「~~~~~♡♡♡」

最早声にもならない悲鳴。

ゴミ箱にゴミを捨てるように、孕み汁をクラウディアの膣へと捨てた。

「あっ♡ひっ♡ひっ♡」

「動くな」

「い、い♡あぐ♡」

椅子の上から股を広げた彼女に覆い被さり、腰を押し付ける。

数分して、スツキリしたのを確かめてからヌポンと抜き取る。

「あ……♡ああ……♡」

無理矢理純潔を奪われたショックと抗えない快楽の二重苦。

その狭間にいるにも関わらず、見事なまでのアクメと雌の顔を晒していた。

「……まだ、やるよ」

「ひっ♡やらっ♡やらあ♡」

「黙れ」

「っ♡」

彼女の顎をクイ、と持ち上げる。

「ベッドに行こうか」

これが、クラウディアと出会った3日前。
調教の始まりだった。

ライザのアトリエ クラウディア ②

「つていうのが一昨日の君だったね」

現在俺は椅子に座り、膝の上にクラウディアを乗せながら撮っておいた彼女の痴態を見させている。

勿論、クラウディアは全裸だ。

「いやあ、乱れまくってるねえ」

「っ♡あう♡」

「つて、聞こえてないか……」

見せてはいるが愛撫の真っ最中なため、目の前に映る映像は微かにしか見れていないようだ。

「見事なまでの堕ちっぷりだ」

「はっ♡はあっ♡」

「さつきまでの威勢はどうしたのか、なっ」

「んひい♡」

乳首を刺激するだけで彼女は絶頂寸前になる。

もはやそれほどまでに、クラウディアは雌へと変わり果てつつある。

「お父さんが今の君を見たら、どう思うかな？」

「やつ♡いやつ♡」

既に蜜で溢れかえるびしょ濡れの性器。

ソコを指で掻きまわす。

「や、あ♡いつ♡」

勿論、胸への愛撫も忘れない。

「っひゅ♡」

嬌声が漏れ続く。

「んんっ♡」

艶めかしく、身をよじらす姿が堪らない。

「だめ♡だ……め、え♡」

「気持ちいいでしょっ？」

「そんな♡ことお……♡」

膣内に入っている指で奥をくすぐる。

「あっ♡♡」

「おやっ？」

今までで聞いたことのない甘い声が聞こえた。

(もしかして……)

確認のため、もう一度同じ所を刺激する。

「ああっ♡」

水音がいつそう激しくなる。

「っ♡っ♡」

「ポルチオにクセがついたのかな。またイキそうだね」

「っは♡」

「我慢せずに遠慮なくイキなよ」

「や、だ……♡」

「ん?」

ふるふると身体を震わし、息も絶え絶えの状態。

なのに彼女は懸命に耐える。

約束のために。

「私、はっ♡負けない♡」

既に負けまくってる気がするのは気のせいかな?

「こんなっ♡あなた、なんかに、ひう♡」

「……………へえ」

「わた、しはっ♡ああ、っ♡♡」

言葉を遮る。

「ううううううううううううっ♡♡」

「強がつていてもわかるよ?」

「おっ♡」

右手で子宮口を弄り、左手は美乳を弄ぶ。

「もう色々と限界でしょ」

固く尖った乳頭を摘まんて引っ張る。

「あひ♡」

膣内はザワザワと痙攣し、絶頂までのカウントダウンを示していた。

「イキなよ、クラウディア」

「い♡や♡ああ……………♡」

耳を、甘噛みする。

「ふっ♡♡」

溢れかえる愛液が椅子を伝い、床を濡らす。

「ふーっ♡ふーっ♡んっ♡あ、あ、♡」

「やらしいなあ……」

「ひゅひゅ……♡うっ……♡」

風俗なんかじゃ味わえない最高の肢体。

欲望のまま貪るつもりが、いつの間にか魅了にかかったかのように彼女に夢中になってしまっている。

（……おかしいな）

変だ。

思えば、女性に対してここまでこだわるのは初めてかもしれない。

（……まあ、いつか♪）

今は彼女の相手をするのが楽しくて仕方ない。

自分の気持ちはほつとこう。

「きゃっっ」

立ち上がり、彼女を再び椅子へ座らせる。

「……っ♡」

「耐えられなかったね」

「ま、だっ」

「頑張るなあ」

「ここまですると感嘆としてしまう。」

同時に、意地でも徹底的に堕としたくなる。

「じゃあ、こうしよう」

玄関に近づき、扉を開ける。

「……？」

彼女を見れば、呆けた表情に疑問符を受けべている。

何をされる予想がつかないようだ。

「フフッ」

続けて指を、1つ鳴らした。

「なっ、なに、を……？」

「遮断結界を消した」

「っ!？」

「これで君は、いつでもここから出ていける」

困惑のまま固まるクラウディアへ、俺はさらに追い打ちをかけた。

ズボンのジッパーを下す。

「あ……あ……！」

これまで己をいじめ抜いた逸物を目にして、困惑の色が徐々に変わり始めた。
「……ふう。君と戯れると凄く張り詰めるんだよねえ」

赤黒く張り詰めたソレがピクピクと動く。

翡翠の瞳が真つ直ぐに逸物を見つめている。

「ほら、念願の外だよ」

「っ……っ……っ！」

「どうするっ？」

最後の一押し。

後はクラウディアの選択次第。

「はあっ……っ……っ！」

よろめきながら這いずるようには出口へ進む。

「んんん！」

ゆっくりと。

「はっ！」

ゆっくりと。

「っ！」

彼女は進み、足元の近くまで到達してきた。

『……………』

見上げる瞳と視線が交差する。

長いようで短い静寂が訪れるが、彼女の吐息で破られた。

「ふっ」

そして――

「ぢゅぷう……………」

外の光景から視線を外し、怒張を啜えこんだ。

「いい子だね」

「んぐっ♡ぢゅばあ♡」



「っ！射るよ」

「あぶっ♡ふっ♡」

寢室のベッドの上で、思うがままに蹂躪する。

「はあ……♡いつばあい♡」

噴き出す白濁を整った顔で受け止め、付着した液を自分で触れて口に運ぶ。

「ぐちゅっ♡ぱっ♡ペろお♡……はあ♡はあ♡つあむ♡」

スリスリとチンコに頬ずりし、愛おしそうにまた啜える。

「ちよつとちよつと、そんなことしたらまた射ちやうよ」

「ぐぶ♡ぐぶ♡つ♡」

「はら♡」

「ん♡ん♡♡」

彼女の頭を掴み、喉奥まで攻める。

そのまま小刻みにストローク。

「じゅるっ♡ぢゅむっ♡んぶう♡」

「ああ……。気持ちいいよ、クラウディア」

「んっ♡ん♡♡ん♡つ、ぎゅ♡」

すっかり性の虜になった可愛いお嬢様が、捕食するように根本まで頬張っている。

この光景は忘れることができないほど、卑猥な一枚絵と化している。

「また、射るよ」

起き上がると同時、彼女の肩を掴んで押し倒す。
どさりと倒れるように仰向けの上に覆い被さった。

「……ねえ」

「なに？」

「……あなたって寂しがり屋なの？」

「っ！」

唐突な問いかけに言葉が出ない。

「寂しいから、こうやって誰かと穴を埋めるようなこと——」

「黙れ」

「んんっ♡」

秘裂を下から肉棒で擦り上げる。

「わかったようなこと、言うなよ」

「はっ♡んはっ♡」

くちくちと、ぬりゆぬりゆといやらしい音が木魂する。

「そう、やって……あっ♡はぐらかす、の♡」

「……違う」

彼女の両脚を掴み、まんぐり返しの体制に。

「今のっ♡あなたはまる、でっ♡好きな子に、素直になれないように見えるわ♡」
「……違う。違う！」

「っほお♡♡♡あぎっ♡♡♡」

否定と一緒に膣奥まで挿入すると、濁った嬌声上がる。

「っ！っ！」

「ああ、っ♡ぴっ♡ひい♡」

「君が！そんなことを！言える！立場なの！かな！」

「~~~~~♡♡♡」

「ねえ、イキまくってるやらしいお嬢様。君の方こそ、俺のチンポとザーメンが大好きな癖に、さあ！」

「ちっ♡ちゆがっ♡違うっ♡うっ♡」

「違う？ ……ああ、そうか。そういうことか」

身動きの取れないように正常位で押さえつけ、体重を乗せながらピストンを叩きつける。

「おっ♡おっ♡あおっ♡」

「俺の、じゃなくてただ単に男のチンポとザーメンが好きなだけか」
「んああ♡」

胸の奥が熱い。

柄にもなく、何かに対して懸命になっている。

「ほらーほらー！」

「んぎっ♡」

「はあっ！」

やはり、おかしい。

自分の中で何かしらの変化が起きている。

その原因は——。

「……クラウディア」

「はっ♡……ふえ♡」

わかりながらも、誤魔化すようにキスをする。

「んんっ♡ちゅっ♡ちゅれ♡」

お互いに舌を絡め、求め合う。

「ちゅっ♡ぱっ♡んむ♡」

「っは！はあっ……！」

「はあっ♡へっ♡」

獣のような息遣い。

寝台に横たわり呼吸をするお嬢様はあまりに煽情的で——美しく見えた。

「……私のこと、好きなの？」

「……いくら何でも自惚れすぎじゃない？」

「……そうかもしれない。でも、今だけは許してよ。んっ♡」

互いの首スジに顔を埋め、マーキングする。

「ん♡ん♡ちゅう♡」

身体も擦りつけ、心身ともに染め合う。

「ふあ♡……それで、どうなのよ？」

「……どうかな。わからないや」

「なによ、それ」

拗ねるような態度がまた魅力的に映る。

しかし、今は応えたくとも本当にわからないのだ。

「君は、どっちであって欲しいの？」

「……言わせないでよ」

頬が桃色に染まっている。

「男の人のが、じゃない。あなたのが……好き」

「っ！」

「……あなたが、好き♡」



「んっ♡あっ♡あっ♡あゝあゝ♡」

結合部から精液が溢れる。

何回も、何回も注いだ子種が彼女の子宮と本能を満たす。

「ぐう♡うう♡」

亀頭が突き刺さるごとに、吠える。

「い、いつ♡はあっ♡」

絶頂が来ようとも腰に絡んだ脚は解けず、むしろ強まるいっぽうだった。

「はっ！また、イク？」

「イクッ♡イクウ♡」

「俺も、また！」

繋いだ両手の指を絡め、抽挿を絶え間なく行う。

「お、なかあ♡あづっ♡」

情事が始まってから、繋がったままだ。

疲労は感じない。感じる暇がないともいうが。

「あ、あ……♡はあ♡」

「……まだ、するかい？」

「ぜえっ♡ぜえっ♡……うん♡♡」

夜も深まり、山の木々や動物が寝静まった頃。

寝静まったクラウディアにそっと服を着せ、お姫様抱っここの要領で担ぎ上げる。

「……さよならだ」

夜風が漂う空を駆け、ある場所へと目指した。



「ありがとうございました」

「どーもー」

クラウディアを届けた次の日、いつも通り風俗店に足を運んだ。

(やっぱり評判がいいだけだったなあ)

今日でこの街ともお別れということでも来たが、やはり予想通りの結果だった。

(クラウディアを超える人は……いないだろうなあ)

きつかけはどうあれ彼女の言っていた通り、俺はクラウディアに好意を抱いてしまっていたのだろう。

とはいえ、あのまま一緒にいるとこちらが染められてしまいそうだった。

「……………」

賑やかな喧噪の中を歩く。

(尾けられてるな……………)

勘と経験で気づき、人気のない路地へと入る。

「……………まさか、君とはね」

「……………」

尾行の主は——クラウディアだった。

「何か用？　こことはもうおさらばするから早くして欲しいんだけど」

「どこに、行くつもり……………」

「さあね。魔法使いの一人旅に目的地なんかはないよ」

キュツとスカート握っている姿が目に映る。
意を決したような様子で口を開いた。

「一緒に、来ない?」

「……は?」

開いた口が塞がらないとは正にこのことだろうか。

「何言ってるかわかつてる? 犯した相手を同行させるとかおかしいと思うけど。賢い君らしくない」

「……れの、せいで」

「?」

俯きがちの顔が上を向く。

キツと向き、訴えるような怒っているような不思議な態度を示している。

「誰のせいで、おかしくなったと思ってるのよ……♡」

おもむろに、自らの乳房と秘部に触れ始める。

「どれだけいじっても♡慰めても♡自分じゃ、イケないの♡」

欲求を満たすためにその場で自慰を始めるクラウディア。

そこには羞恥の欠片もなく、あるのは雌の姿だけ。

「はあっ♡んっ♡イカせてえ♡」

「っ」

「イカせてよお……♡」

目に見えないフェロモンにあてられ、風俗でスッキリしたはずの股間が気づけばガチガチに盛り上げられている。

(やりすぎたの、かな……?)

因果応報。この場合は自業自得かな？

「責任っ♡んく♡取りなさいよお♡」

「……いいよ。でも、その前に」

近づいて、抱き寄せ密着する。

「あっ♡」

「ちよつと休憩していいこうか」

こうして、長年の一人旅は唐突に終わりを告げた。

「ねえ」

「ん？」

「いい加減、名前くらい教えてくれない？」

「……気が向いたらね」
「……バカ」

アズールレーン ネルソン ①

人類は今、存亡の危機に瀕して……いない。

うん。特にこれと言つて世紀末的なことはない。

一昔前は… セイレーン… とかいう謎の海洋勢力のせいで、人類は制海権の9割を喪失したがそんな時代は今や昔の話。

とはいえ、奴らは今だに突然現れ攻撃を仕掛けてくる。

対抗するため、…ユニオン…、…ロイヤル…、…鉄血…、…重桜…の四大国家を中心とした軍事連合 アズールレーン…。

アズールレーンの活躍で制海権を奪還するも、連合内での意見対立が浮き彫りになり、やがては離反軍事組織… レッドアクシズ… という存在も出てきたが——今はもう無い。

「ロドニー、まだかあ〜?」

「まだですよ〜」

面倒事を強いて上げるとするなら、一部の口ばかり達者な上官共の相手ぐらいだろう。

「……ロドニー、もう着いていいんじゃないか？」

「もう、指揮官！」

船が女性へと擬人化した者、.. KAN—SEN..。

うちに所属するその1人であるネルソン級2番艦.. ロドニー..。

「気持ちわかりますけど、少し落ち着いてください！」

「うっ……！　そう言われてもさあ……」

軍法会議で母港を3日も留守にしてしまったのだ。

運営に関してそこまで心配なくいいと思つてはいるが、重要なのはソコじゃない。

「早くネルソンに会いたんだよお……」

そう。重要なのは愛しの秘書官であり、長年の相棒兼指輪を渡した彼女。

ネルソンと3日も触れ合えてないことだった。

「あー……もうダメ。死ぬ。死んじゃう。ネルソンエナジー切れて死ぬわこれ」

「なに馬鹿なこと言っているんですか。ほら、見えてきましたよ」

「おっ！　マジか！！」

走り続けるタクシーの窓から外を見ると、最早我が家とっていい母港の姿が。

東洋前線第一部隊、通称.. トウイチ..。

俺が指揮する場所だ。

「帰ったらちゃんとみんなに挨拶して、報告書ですからね？」

「うええ……」

「トウイチの指揮官らしくしゃんとして下さい」

「へーい」

しばらくして、タクシーが無事到着。

すぐさま降りて走り出した。

「ロドニー、あとよろしく！」

「あ、指揮官！……もう、仕方ないんですから」

会計諸々をロドニーに任せて、全速力で駆ける。

「つて、待て待て待て待て」

入り口をくぐり抜けたところで脚を止める。

「ネルソンが今どこにいるのか知らねえ……」

ここは中々広い場所だ。

すれ違って面倒になることは避けたいし、時間が惜しいほど彼女に早く会いたい。

「さて、どうすつか……つと、あれはー……？」

前方に人影。

後ろ姿でも目立つあの王冠の持ち主は……。

「陛下ー!!」

「ん？ 何かしら、声が聞こえた気が……」

ダツシユで迫り空中で1回転。

キヨロキヨロと周りを確認する彼女の上から綺麗に降り立つ。

「陛下ー!!」

「うわっ！ ビ、ビツクリしたじゃない！」

驚愕の表情を浮かべた彼女、クイーン・エリザベスは相も変わらず女王らしく胸を張った態度でいた。

「ただいま、陛下。ところでネルソンどこ？」

「おかえり、下僕。ちゃんと仕事はしてたんでしょうね？」

「してたしてた。ところでネルソンどこ？」

「後でロドニーに聞いてやるから」

「……え」

マズい。時たま会議中うわの空だったのがバレてしまう。

い、いや、そんなことよりだ。

「へ、陛下。ネルソンがどこにいるか……」

「……ハア。ま、今はいいわ。ネルソンなら多分執務室よ」

「オツケー！ あ、お土産あるからロドニーから貰ってね」

「わかったわ」

一言伝えてから、走りたい気持ちを押さえ早歩きで執務室へと向かった。廊下を走るのは厳禁とポスターを貼った自分が恨めしい……。

「全く、あのバカ下僕は」

私、クイーン・エリザベスは走り去って姿が見えなくなった件の人物へと悪態をつく。

下僕と長い付き合いになるのは私を含め何人かいるけど、みんなアイツを信頼して過ごしている。

ネルソンが絡むとアホでバカでどうしようもなくなるけど、今では新参者ですら、それを見てすぐに馴染んでしまう程の日常がここにはある。

「陛下……」

また、後ろから呼びかけられる。

振り向けば、同型艦の姉妹ウォースパイトが元気に駆け寄ってきていた。

「陛下、お茶の用意が……あれ？」

「……何よ」

彼女は私を見るなり、不思議な顔を浮かべる。

「えっと、その、何かいいことあった？」

「別に、何も無いわよ」

「え、でも……。凄いニヤけてるよ？」

「ツ!!？」

指摘され、私はすぐさま両手を顔に添え確認する。

触れてみて、確かに口角が僅かに上がり可笑しな表情になっているのがわかった。

「あ、もしかして指揮官帰ってきたの？」

「ハ、ハア!!? 下僕は関係ないし！」

「陛下陛下。わかりやすいよ」

「グッ……」

言葉に詰まり渋い顔をした私とは逆に、ニコニコと笑うウォースパイト。

「やっぱり陛下も寂しかったんでしょ？」

「そ、そんなわけないじゃない！」

「そうかなー？」

このままだと埒があかないわ。

「もう！ お茶の用意ができたんでしょ!? さっさと行くわよ！」

「あ、待つてよ陛下〜！」

ズカズカと音を立て茶会部屋へと向かう私をウォースパイトは追いかけようとする。そんな彼女へと振り向いて、私は命令を下した。

「ウォースパイト、アナタは各K A N N E R S E N 達にしばらく執務室に行かないよう言うてきなさい！」

「うええ!!? 何でこのタイミングで!!?」

「いいから早く行く！ 別に1人でやる必要はないから誰かに手伝って貰いなさい！」

「ふえ〜ん！ お茶会があ〜！ お菓子があ〜！」

半ベソ掻きながら下僕とは逆方向へと去ってゆくウォースパイト。

廊下を曲がり姿が見えなくなつてから、私は溜息をつく。

「ハア……。ほんと、世話がやける下僕なんだから」

指輪の相手を選ばれなくても、私の下僕はアイツだけ。

「荷物持ちに借りるくらいは……いいわよね？」

今後の予定を考えながら鼻歌混じりに、私は茶会部屋へと向かった。

「ネールソーナー！」

陛下と別れて、執務室へと目指す。

トウイチは東洋前線の中で1番の広さと規模を持つ。

主に戦艦を主戦力とした部隊である。

(つし！ 見えてきたあ！)

見慣れた扉。

あそこを潜ればネルソンがいる。

「ただいま、ネルソ……ン？」

扉を開け帰還の一言を告げようとしたが――

「つく♡うつ♡……はえ？」

「……」

「つ！ し、指揮官!?? かか帰って!??」

何が起きているのか簡潔に説明しよう。

ネルソンがソファで俺の軍服をオカズにオナツてた。

「ち、違うのよ！ あ、いや、違くないけど？！？」 これは……」

いつもキリつとした彼女が顔を真っ赤に染め、弁解をしている。

「やること終わって、掃除しようとして……！ あんたの服を整理しようとして……！」
服はグシヤグシヤに乱れ下着もズレ落ち、まるで湯気が出るかのように汗だくだ。

その光景だけで、どんな自慰行為をしていたのか想像がつく。

「た、たまたまよ！ たまたま匂いが気になって、その……。寂しかったとかじゃ——」

「ネエルソォーソォー!!!」

「キャアアアアッ!?」

我慢できなくなった俺は扉を閉め鍵を掛けて、さながらル〇ンのように空中で服をパージして飛びかかった。

「ネルソンネルソンネルソンネルソン……」

「ちよっ！ 帰ってきて早々……！ やめっ、あっ♡」

バタバタと抵抗されるが、頬に手を添えるだけで甘い声が出ている。

「んんっ♡変なところ、触っ、んっ♡」

「うわ、ドロドロだ……」

横になったネルソンの上に乗っかかり、手が触れた蜜壺へと指で摩る。

それだけで、ピュッピュッと愛液が少量噴き出す。

「あ、あんたねえ……♡」

「こればかりはネルソンが悪いと思うけど？」

「う、うるさい♡んひっ♡」

指先を1つ、第一関節まで膣内へ抜き差しする。

「そん、な♡浅い、とこ♡はっ♡」

「ネルソン……」

「んにゃ♡ふっ♡ふむっ♡んーっ♡」

唇を、唇で塞ぐ。

「ちゅ♡んれ♡れろっ♡れろっ♡んちゅ♡ちゅう♡」

歯の一本一本に舌を這わせ、唾液を啜る。

絡まった舌は互いに求め合うせい、溶けてくっついてしまっそうだ。

「ちゅっ、んれ♡はあむ♡んむう♡」

肉体同士が密着し、肉厚な女体がむにむにと押し返してくる。

「つば、はあ♡あつ♡」

「ほんと、可愛い」

「んっ♡顔、見ないで……♡」

「やだ」

「……バカ♡」

スラックスの窓から肉棒を取り出す。

抑制されたネルソンへの愛を3日振りに解放する時がきた。

「お、おつきい……♡」

我慢を重ねた息子はビキビキと震え、天を貫くように勃起している。

先走りを滲ませる鈴口が秘部に触れる。

「んっ♡♡♡」

瞬間、ネルソンが震え、亀頭を膣がパクリと啜えた。

結合部からは濃い性臭が匂い立つ。

「~~~~♡うっ、っう♡」

「イツた？」

「ふう♡ふう♡…：な、なに、よ♡悪い？」

「いや、むしろ嬉しい」

「ほんつとに、はっ♡あんたはあ♡あんっ♡」

ゆつくりと腰を押し進める。

「あ、ああ~~~~♡」

先端が奥を小突き、膣内全体が息子で埋まった。

凜とした切れ目はは涙で潤んで垂れ、蕩けた表情を見せてくれる。

こちらを見上げる綺麗な顔は不思議な艶を放つ。

「き、たあ♡」

「っ！」

「んっ♡んっ♡ああ♡っ♡」

小さなストロークで味わうように動く。

握り合った両手を互いに何度も握り直す。

「あ、っ♡ん、んっ♡気持ち、いいっ♡」

徐々に動きを大きくし、快感を高めてゆく。

「ん、う♡すきい♡す、きっ♡しき、かんっ♡」

「ハアッ！ ハアッ！ ネルソンッ！」

「はああ、っ♡○○っ♡すきっ♡○○のちんちんすきい♡んっ、きゅ♡」
既に服からこぼれ落ちた胸は重そうに揺れ弾む。

「ちんちんっ♡もつと、きてえ♡○○の、ほしいのっ♡」

気づけば、ネルソンの美脚が腰に絡まり逃げ場がない。

絡まった脚は、ピストン運動に合わせるように緩みと抑えを交互に行う。

「がまんっ♡してたぶん、いっぱい♡きてっ♡だしてっ♡」

「フー！ ウツ！」

「ひゃっ♡」

水音を上げ、一際強く密着。

チンコに媚びた子宮口が吸いついて離れない。

「はあ♡はあ♡っん♡……はあ♡」

鼻と鼻が触れそうな至近距離。

桃色に染まったような吐息が聞こえる。

「っ♡っ♡精子、くるのね♡」

「ああっ。愛してるぞっ！ ネルソン！」

「……私も♡好き、よ♡っ♡」

股間がムズムズとし、ナニカが辜丸から駆け上がってくる。

「出すぞっ」

「はあっ♡……うん♡あっ♡」

「ん、っ♡♡♡ん、ん、っ♡♡♡」

飛び出す子種が子宮を満たし始める。

白濁は段々と量が増してゆき、瞬く間に溢れ出す。

「ちよ、あっ♡」

イカ臭い白が時折、結合部から少し吹きだす。

「出しすぎ♡ふくっ♡はいらな……っ♡」

「もつと……!」

「ひっ♡」

雄の本能が働いたのか、無意識に腰をグリグリと押し付ける。

「バツ♡イクツ♡イツ♡」

「クツ♡♡♡~~~~~♡♡♡」

膣内が収縮し、肉棒を強く締め付けられる。

今だし続けるモノを催促……搾り取るように根元から先端へ、ギュウツと絡みついてくる。

「あっ♡……おっ……♡おっ♡」

開いた口から涎を垂らし、痙攣するネルソン。

「ほっ♡ま、またイク♡イクツ♡」

「ほお♡おっ♡」

昂りは収まることを知らず、交尾の形を崩せない。

「はあ♡あっ♡」

「ネル、ソン……!」

「ふうっ♡んむゆ♡」

キスをし、2人して絶頂を噛みしめながら落ち着くのをただ待つ。

舌や唾液の交換はしない。

「……っ♡……っ♡……」

何秒、もしくは何分か過ぎた頃、息苦しくなってきたので口を離す。

「ぶはっ♡ひゅー……♡ひゅー……♡」

吸いつく子宮口と膣肉からチンコをゆっくり抜く。

「うう……♡うう♡はえ♡」

「はあ……はあ……。めっちゃ出た……」

蜜壺から流れ出るザーメン。

荒く息づくネルソンはぐったり状態だ。

「ふっ、くっ♡ほんと、バカ♡」

悪態をついたと思いきや、口をバカリと開けた。

「ひよ^ほら^ら♡ひれ^綺いに^麗ひな^にさい^{しな}い♡……♡むぐう♡」

言われた通り汚れた逸物を口に突っ込む。

艶やかな金髪を撫でながら、腰を前後する。

「むぢゅっ♡んぐっ♡ぢゅろお……♡じゅぶっ♡ぶぶっ♡」

ネルソンもバキュームをしながら残り汁を吸いつつ、下品に頬張ってくれる。

膣とは違う口内の熱で息子が喜ぶ。

「む^むっ♡ん、ん^んぐう♡」

献身的なお掃除フェラが最高に気持ちいい。

尿道に詰まっていた精子がトロトロと吐き終わってゆく。

「ぢゅっぽ♡ぢゅぼっ♡じゅるう……♡んー……♡んむう♡」
「は、あ……！」

「むー……♡ううん♡ぢゅぶゅっ♡ぢゅりゅうくく……♡」

「……ちゅっ♡♡♡……♡つぷ♡♡♡♡♡♡♡ちゅぼっ♡♡♡」

口に溜まった精子を嚙下する。

「んっ、ぐぎゅ♡♡ち♡……ゴクン♡」

はあ……と青臭い息をついた。

その姿またいやらしくて、堪らなく愛おしい。

「……ちよつと、なんでまだおっきいのよ？」

「ネルソンがえろいから」

「……もう♡」

何だかんだ言って、彼女もまだヤリたりないらしい。

再びキスをしようとする顔を近づけようと――

「姉様、戻りまし……」

したところで、ロドニーが扉を開けてやってきた。

『……………』

無言の静寂。

数秒して、ネルソンが状況を把握したのか真っ赤になって言い訳を始めた。

「あ、あのね、ロドニー？ これは指揮官が無理矢理……」

「は?! 元はと言えばネルソンがオナって——」

「ちよつとお?! なんてこと言おうとしてんのよアンタ?!」

「はああ?! 事実ですけどお?!」

「2人とも」

『ツ』

ニツコリ笑顔のロドニー。

その後ろには般若のような巨人が立っていた。

「正座」

『ハイ』

この後めちやくちや怒られた。

アズールレーン ネルソン ②

指揮官業務の朝は早い。

それは、所属しているKAN—SEN達も同じだ。

トウイチ^チの場合、各KAN—SEN達はシフトで動いており、それに従って働いている。

夜勤警備や早朝パトロール担当もいれば、私用で有給を取り遊びに出かける奴もいる。

「あゝ……やる気でねー……」

しかし、シフトで動くのはKAN—SEN達。備品整理や事務担当、整備士といった人達であり、指揮官はまた別である。

「ネルソン……」

「ハイハイ、とりあえずこの書類お願いね」

「ウヘエ……」

基本的に週休2日制だが、そうもいつてはられない状況は多々あるため、休みなんて無いものだ。

「昔前のセイレーンとの戦時中にもっと酷かったと聞いたことがある。

「第一艦隊はそろそろ戻ってくるか？」

「ええ。ロドニーから通信がさつきあったわ」

「なら、補給と装備調整の配備を頼む」

「わかったわ」

テーブルに置かれたコーヒーをひと口飲み、顛顛をほぐしながら、積まれた書類の一番上を手を取った。

「休憩する？」

「んー……。いや、まだ頑張ってみるわ」

気遣いを受けつつ、次の書類へと手を伸ばして内容を見やる。

「おつ、そういうえばそろそろハロウィンだな」

近隣の街が仮装などで溢れ返る季節がやってきた。

ここもその例に外れなくKAN—SEN達も特別な衣装に身を包み、駆逐艦の子達はお菓子をねだったりと巷でも人気なイベントだ。

「つて、もう近いじゃねえか!!」

「あら、言ってなかったかしら」

「最近執務室に籠りっぱなしだったから知らなかったわ」

ネルソンが一緒にいてくれたから良かったが、1人ならどうなっていたか。

「ほんと、ネルソンがいてくれて良かったわあ」

「何よ急に」

「いんや、何でもない。ところで……」

片手間に雑務処理をしながら、期待を込めて問う。

「今年もあの魔女衣装着てくれんの？」

思いつくのは紫を基調としたハロウィン姿のネルソン。

いつもより露出が多いような少ないようなピッチリした衣装。

秋でしか見られないのがとても勿体ない。

「……着て欲しいの？」

「モチロン！ あ、できたらアレで夜も——イタイツ！」

「絶対に！ 嫌よ！」

持っていたワークボードで頭を叩かれる。

痛みに悶えながら彼女を見ると顔を真っ赤に染めていた。

ソレは怒っているからか、それとも恥ずかしいからなのか。

「イッツツ……」

「ホンットにあんたは……。いいから仕事しなさい」

「じゃあ、せめて何かご褒美的なものが欲しい」

今日中には処理できそうな量の書類だが、やりがいがないとやっていられない。

ましてや、此処のところ缶詰状態だったのだから。

「ご褒美つて……ハア……。もう、子供じゃないんだから……」

「俺はまだ子供なんだよ」

「何よそれ」

何気なく、慣れ親しんだ会話を続けていると電子音が部屋に鳴り響く。

音を発する原因である通信機器をネルソンがポケットから取り出した。

「整備班からか？」

「ええ。ロドニー達、帰ってきたみたいね。配備ついでにみんなの様子見てくるわ」

「あいよ」

カツカツとヒールを鳴らして部屋から出る直前、ネルソンの足が止まる。

ドアノブに手を掛けていた手を引っ込めて、こちらへ振りむいた。

「？」

「……仕事。頑張ったら衣装、着てあげるから」

一言言い残し、パタリと扉を閉じて出て行った。

シーンと静まり返る執務室。

ネルソンが残した言葉が数秒間頭の中をグルグルと回り、徐々に飲み込んでゆく。

「……オツシヤア！」

理解が追い付いた瞬間、手にしていた書類をスグに片付けた。

その後、作業は夜中にまで及んだが全ての書類が無事に処理された。



夜。

基地敷地内の我が家へと帰ってきた俺達は食事を済ませ、順番に身を清めることに。

今は、風呂に入っているネルソンを寝室にて待っている状況だ。

ベッドに腰掛けソワソワと待機していると、ドアの開かれる音が聞こえた。

「ま、待たせたわね……」

視線を移すと、そこに居たのは魅力あふれる魔女の姿が。

そんな魔女は、こちらに歩み寄り隣へと腰掛けた。

如何にもな象徴なとんがり帽子を片手で抑えながら、頬を赤く染めている。

「何か、言つてよ……」

「……スケベ」

「スっ!! ハア!!」

「えっち。えっちすぎるやろ」

一見して、露出度が下がっているようで下がっていない。

いつも覗かせていた太ももは黒タイツに包まれているものの、骨盤辺りから丸見え。

胸元は普段のように上乳……谷間を向き出しはいるが、ピッタリと貼りついて揺れ

ていた。

「帽子、可愛いけど今は邪魔だな」

「あっ……」

彼女の頭の上から退かし、邪魔にならないところへ置く。

隔たりが無くなったお陰で、紅潮した顔がハッキリと捉えられた。

湯上りのせいもあるのか、艶のある肌も火照りを醸し出している。

「んっ……♡」

スタイルの良い、引き締まったウエストに手を回し引き寄せた。

彼女の首元へ顔を埋める。

「ハア……。落ち着く……」

「もう……♡」

子供を宥めるように、背中をポンポンし擦ってくれた。

「意外ね」

「何が？」

「今日のもつと、がつつかれると思ってたわ」

「……がつついて欲しい？」

「……ちよつとだけ。でも、まずは——」

紅色の瞳と見つめ合う。

ネルソンの唇との、僅か数センチの距離は小さくなつてゆく。

「ん♡ちゅっ♡」

ぷるりとしたリップへ合わせ、啄むような。

「ちゅっ♡んっ♡」

「っ、はあ。……次は、何をご所望？」

「……もつと、キス、したい♡」

「……お任せあれ」

希望通りの、2回目のキス。

「ちゅっ♡ちゆる、んれっ♡」

舌通しを絡め、唾液が混ざり合う。

「ぢゆる♡じゆるっ♡っん♡んぶ、へあっ♡」

「ツ……………」

「んんツ……………♡ んむっ♡」

「はあ、グツ……………」

深いキスをしながら、手持無沙汰な手が彼女の肢体へと向かう。

左手は胸をたぶたと触り、右手は股藏を弄る。

ソレに対抗してか、彼女もキスをしながら器用に寝巻から陰茎を出し、両手で刺激してきた。

「もう、こんなにおつきくして♡ バキバキじゃない♡」

「そっちこそ、乳首勃ってんじゃんか。こっちだつて濡れてるし」

「んう♡ わ、私だつてアンタと同じで我慢してたんだから……………アツ♡」

ペロンと生乳を露わにする。

やわつこい乳肉を揉み、乳首をクニクニと摘まむ。

「ツつう♡ あっ♡ あっ♡ 気持ちっ♡」

下の方も、まだ衣装の上からというのに段々と水音が増してゆく。

「はあ♡ はあ♡ んっ♡」

耳に届く甘い嬌声。

五感から得る情報でこちらにも興奮が落ち着くはずも無く、肉棒からは次々と先走りが

溢れる。

「うっ、ふふっ♡ ぬるぬる、ねっ♡ んはっ♡ ちゅう♡」

玉袋から根本。幹から先の亀頭までをにゆるにゆると手が這いつくす。

血流が一点へと集中し、いつ噴火しても可笑しい。

「んー♡ ひゆれ♡ ぢゅじゅっ♡ へろ♡ へえろっ♡ ……ふはっ♡」

「や、べっ……!! もう出そうだぞ、コレ……!!」

「それじゃあ、最初の一発は何処でしたいのかしら?♡」

「……む、胸で頼む」

伝えると、笑みを浮かべながら彼女はベッドから降り、膝立ちで俺の開いた足の間に収まった。

「あんまり汚さないでよね」

「善処する……」

振り返った先つぼが、音を経て下から谷間に接する。

「んっ……んっ……♡」

「うおお……!!」

豊満な双丘へ差し込む快感。

視覚的には飲まれるかのような景色。

「全部、見えないわね♡」

我が息子の全貌は姿を隠され、全方位から抗えない乳圧に喜声を挙げまくる。

「んっ……しよっ♡」

自ら手を添え、持ち上がる乳房に追従して陰茎がビクつく。

「フッ♡」

一擦りで射精をさせる気満々なパイズリに腰が浮く。

思い切り持ち降ろされた巨乳は形を変え、股間周囲にも広がる。

「フウ♡ フウツ♡ ツ♡」

「ア、アッ!」

「なに、我慢してるの、よっ♡」

「——ッ!」

グーにした両手が、横から強く胸を押す。

そのまま捏ねるように小さくズリズリ、むにむにと極楽を魅せる。

「いいからっ♡ 遠慮せずに、出しなさいっ♡ つちゅ♡」

パイズリによって僅かに覗かせる亀頭にキスの雨。

「ちゅっ♡ ちゅび♡ ……べろっ♡」

愛おしそうにチンコへ接吻を繰り返してくれるネルソンの姿で、射精欲が限界に近づ

く。

思考が白く、白く、なってきた。

「ネルソンツ……ネルソンツ……！」

「ちゅぷ♡ あふっ♡」

「クル……！」

「んっ♡ ほら♡」

胸に添えていた両手がこちらに差し出された。

反射的に掴み、指を絡めて恋人繋ぎに。

たばんつたぶんっ、と繰り出されるノーハンドパイズリがザーメンを絞りにくる。

「きなさいっ♡ 全部飲んであげる♡ あむ♡」

「~~~~~ッ♡♡」

啜えられた直後、射精が始まった。

勢い良く出た精子が彼女の喉奥を打つ。

「んぶ♡♡んっ♡♡んっ♡♡」

目を瞑り、ゴクゴクと喉を鳴らして嚥下してゆく。

「ぎゅっ♡んくっ♡」

「うあっ……………」

「じゅぞぞっ♡んっ♡ッ、んぐウ♡」

尿道に残っているのは勿論、睾丸で造られた子種すらも吸い付いて飲もうと時折バキュームがくる。

「ぢゅっ♡んつく♡びゅぢゅっ♡ぢるうっ♡」

「ハアッ…………ハアッ…………」

「く♡くっ♡ちびゅっ♡きゅんっ♡……………つぶ、ぶあ♡」

吐精が終わり閉じられていた谷間が開かれると、飲みきれなかったザーメンと先走りの臭いが香る。

濃厚な半固形を射精してにも関わらず、肉棒は今だ硬いままだ。

チラリと床を眺めると、小さな水溜りができている。

「……………♡」

ソレを作った張本人は衣装のベルトを外し、タイツなども引つpegがして俺の名前を呼んだ。

「……………ネルソン」

「……………うっ♡んハ♡」

ギシリと、2人分の重さでベッドが鳴る。

俺は座ったまま、見つめ合い向かい合った対面座位に。

互いに背中へ両手を回し、起立した愚息の真上に位置した女陰からは蜜が垂れ落ちる。

「イクぞ……」

「ツ♡んー……♡」

ちゅぷんと亀頭が入り込み、ゆつくりと突き上げる。

「ツ♡ツ♡あっ♡」

全貌が彼女の膣へと収まり、奥を震わす。

灼熱のような肉壺は埋め込まれた剛直に歓喜し、ヒダを纏わりつかせ、水気を増やす。

「ううう……♡おくに、きてるう……♡」

最初にハグをしたように、また抱きしめ合う。

ゆさゆさと腰を揺らして快感と幸福を求める。

密着によって彼女の胸が身体に当たり、潰れ、ひしゃげ、劣情を煽る。

稀に、固い乳首の感触を感じる。

「ふ、ふウツ♡ちん、ちんっ♡ちんちんすきっ♡もっ♡」

「ツー」

「んおっ♡ ほっ♡ もっとっ♡ ついてえ♡ ずんずんっ♡」

寝台のスプリングが激しく奏でられる。

「ンツ♡ ンツ♡ ンツ♡ あっ♡ アツ♡ クルツ♡ イクウ♡♡」

子宮口に先が押し込まれた瞬間、ネルソンが跳ねた。

「イイツ♡♡♡ ～～～～～♡♡♡ ハッ、ハアツ♡♡♡」

「○○ツ♡ ま、またっ♡ きちやうう♡」

絶頂に呼応して膣肉が締まる。

次の達しももう近いらしく、膣内がウネウネと縦横無尽に蠢く。

「きてっ♡ ○○も、いつて?♡ 一緒にっ♡」

「ちよっ!! あっ、やばい……っ!」

「ふぎゆう!!♡♡♡」

余りの催促に、ビュルリと甘イキしてしまった。

「あつつ♡ なかにっ♡ き、たあ♡」

「まだ、まだっ! 出るから、な!」

「——っ♡ ちゅむ♡ ふっ、ンツ♡」

ディープキスをしながら、その時を待つ。

「んー!♡♡♡ んぷ♡♡♡ ちゅぷ♡♡♡ んれっ♡♡♡ んぷ♡♡♡ じゅっ♡♡♡」
激しく。最愛の彼女へと愛を伝える。

「ちゅばっ♡♡♡ んうれ♡♡♡ にゅれ♡♡♡ ちゅむ、んっ♡♡♡」
「——ッ!」

「……っ♡♡♡♡♡」
ピタッと、俺は動きを止めた。

「……っ♡♡♡ちゅ、ちゅっ♡♡♡ ……っ♡♡♡ れえ、むっ♡♡♡」
動かない俺を疑問に思いながらも、彼女はキスは続ける。

——刹那、陰茎が大きく震えた。

「ッ♡♡♡♡♡」
同時に、びゆるびゆると白濁が子宮を埋め尽くす。

「~~~~~ッ♡♡♡♡♡~~~~~ッ♡♡♡♡♡」

塞がれた口からくぐもった声が伝わる。

必死に鼻で呼吸をしている中でも、躊躇いなく射精は続く。

「ツ♡♡♡♡♡ ツ♡♡♡♡♡ ツ♡♡♡♡♡」

当然、キスはしたまま。

「……ちゅ♡……ムウツ♡……ん、んう♡」

触れ合った部分の熱が心地良い。

ずっとこのままでいたくなる。

息子の脈動は小さくなってゆき、名残惜しそうに子宮口と膣は吸い付きを繰り返す。

そんな中、トントンと背中が叩かれた。

「ぶはっ！ ハア………！」

「ひゅー♡ ひゅー♡」

息を整えながら、ワナワナとネルソンは身体を震わす。

「あ、あんたっ♡ ぜえっ♡ 殺す気なのツ………!!♡」

「……かもな」

「——キャツ!!」

抱きしめたまま、そのまま俺は後ろへと倒れる。

滑らかなシーツの感触を背中に感じながら彼女を見上げ、再び腰を動かした。

「それくらいに、ネルソンとキスして繋がってたい」

「ッ♡ ちよっ♡ まっ♡」

精液と愛液が混ざりあつた音が反響する。

クタリと前倒れになり、ネルソンの身体はこちらへ預ける体制に。

「まっ、まっ♡ ねえっ♡」

「やだ」

「ふ、ふこのっ♡ 話を、きつ♡ ああっ♡」

深夜。日が昇るまで近いようで遠い時刻。

俺達は堪えていた欲情を爆発させ、気が済むまで貪りあつた。



数日後、ハロウィンイベント当日。

ウチのKAN—SEN達のはとんどが仮装をし、街へ繰り出し近くの住民と交流を深めたりしている。

そんな中、俺とネルソンはというと。

「腰がイテエ……」

「う、動けない……」

盛りに盛り過ぎて連日シまくった結果、肝心のイベント当日に2人揃って腰砕け状態。

俺は我が家のリビングにある机に突っ伏し、ネルソンはソファで寝そべっている。

「……おふたりとも馬鹿なんですか？」

「馬鹿でしょ」

「馬鹿ですよねー」

そんな俺達の様子を見に、ロドニーとクイーンエリザベスとウォースパイトの3人がやって来ていた。

「先を考えずにお猿さんになるからこうなるんですよ。全く……」

「ウギギ……!」

「日頃から少し自重するように言っていたのに」

「こ、今後は気を付けるわ……」

仲良く腰へ湿布を貼られ悶える俺達を他所に、外は賑やかなお祭り騒ぎのようだ。

「折角のイベントなのによお……」

「今は我慢よ下僕。それに、来年もあるんだから気にしないの」

「指揮官もネルソンも今日はお休みよ」

「ハロウイン衣装……はしゃぐネルソン……エッチなネルソン……」

「何ブツブツ言ってるんですか」

「そ、そうよ！ 意味わかんない事を適当に——イッタイ！」

ガバっと身体を起こした途端、ネルソンの悲鳴が部屋に響いた。

微かに立ち上がったままの姿勢から、ゆっくりとソファへと再び寝直した。

「……ハア。明日も仕事があるんですから、ふたりともしっかり休んで下さいね」

『ハーイ』

「フフツ」

「クスクス」

「……ちえっ」

外はお祭り騒ぎにもかかわらず、ロドニーとクイーンエリザベスとウォースパイトの3人は1日中俺達と一緒にいた。

今日も平和に1日が過ぎた。

番外編 a f t e r

ライザのアトリエ　ライザ　③

ライザの恋人になり数ヶ月。

新たな出合いや仲間と共に手にした平和を謳歌していた。

「うしつ、こんなもんか」

村を訪れたアンペルさんから錬金術を教えてもらい、既に独学で色々試すライザの手伝いをする日々。

「つたく、人使いが荒いの何のつて……」

結ばれたといえど今まで通りに近く、強いてあげるならみんなが気を使つて2人になる時間を作つてくれることだろうか。

ライザを含めた仲の良い女性陣もみな、相手はいるし。

特にリラさんは△△さんとラブラブで子持ち、クラウディアは付き人の□□さんとよく一緒にいるのを見かける。

「ただいま〜つと」

「あ、おかえりー!」

すっかり慣れ親しんだアトリエに戻ると、ライザが煮え立つ錬金釜をかき混ぜていた。

「成果はどう？」

「木材と薬草類に関しては言われた数以上揃えたけど、それ以外は少し物足りないかもな」

「そつかく。ま、仕方ないか！」

背負った籠を下ろし、釜の中身の様子を覗く。

臭いは特にしないが、何とも言えない色合いをしていた。

「……今回は何作ってんだ？」

「特にコレっていうのは決めてないんだ。今後の参考になるように試行錯誤でお試して感じ」

「つまり、何ができるかはわからない……と」

大丈夫なんだろうか。心配だ。

「今日は誰も来ないのか？」

「うん。みんな用事があるらしくて……」

とゆうことは2人きりか。

「なら——」

「んっ♡」

近づき、ズボンに包まれた桃尻を右手で鷲掴みにする。

「やりたい放題、だな」

「まつ♡今は、鍊金の途中……っ♡」

後ろにまわり両手でこねると、媚びるように徐々にケツが突き出す体勢に変わる。

「のわりに、触って欲しいみたいだが？」

「そ、それ、はあ♡あん♡」

キュツと、軽く抱き寄せる。

右手はまとわりつくようにまわして胸を揉み、左手は変わらずケツを弄ぶ。

「あく、気持ちいい」

「あっ♡揉んじや、んう♡」

「相変わらず胸も尻もエロエロだなお前は」

「はあっ♡」

下着はやはりつけていない。

それもあり、布地の下に眠る柔らかさがまた心地いい。

「んあ♡つく、う♡」

「ほらほら、かき混ぜるのやめちゃダメだぞー？……お、乳首みつけ」

「~~~~~っ♡」

コリコリと愛撫すれば身体が跳ねる。

女体特有の甘い香りを放ちながら、ジワジワと熱を持ち始める。

「ズラすぞ」

「っ♡」

ホットパンツをズリ下げれば、シミひとつない艶のあるデカケツが現れ、上着も捲ると、先がぷっくり膨らんだ双丘がたゆんと露わに。

「ふっ……!」

「やつ♡ああ♡」

ズボンの窓から肉棒を取り出し、素股でミチミチとした太ももを堪能する。

必然的に擦れる秘部からは愛液が次々と溢れ出す。

「うっ♡ひっ♡ん、ん♡はっ♡」

「もうずぶ濡れかよ。ほんつとエロいな」

「だっ♡だっ♡てえ♡これ、あっ♡気持ち、いっ♡」

「手が止まつてるぞー?」

かき混ぜ棒はもはや身体を支える為だけに必死に掴み、上体は項垂れ、完全に尻を突き出すバックの姿勢になる。

「あゝ♡あゝ♡」

手のひらからハミ出す巨乳。

固い乳頭が飽きのこないアクセントで堪らない。

「んう♡おっぱいい♡あん♡おっ♡乳首だめ♡」

亀頭から漏れる先走りが愛液と混ざり、淫臭を放つ。

アトリエ内が卑猥な一室にかわってゆく。

ヤリ部屋と言われても否定しきれない。

「っ♡ぐっ♡いっ♡」

「はあ……いっ♡」

改めて、両手で尻を掴み直す。

「ふっ♡ふっ♡ふっ♡」

ずっしりとした重さの尻タブを開く。

「……っ♡♡あはあ♡」

アナルが興奮で引きつき、膣口がクパクパと開閉を繰り返しながら誘惑している。

グズグズにほぐれた膣道から奥まで丸見えだ。

亀頭の先でキスをする。

「あゝっ♡」

「ん、くっくぐんっ♡れっ♡」

交尾の盛り具合は最高潮。

ライザの方も棒を掴んでいた左手をコチラの顔に添え、貪ってくる。

「ちゅば♡りゅんっ♡はあ♡ふぎっ♡」

その様に興奮がさらに加速し、一刻も早く精子を届けるためピストンを早める。

「おっ♡おっ♡おっ♡おっ♡」

項垂れた上体に密着し、ひたすら腰を振る。

交尾という意味がありありとわかる光景。

「イク♡イクっ、う♡」

ライザの肌がざわつく。

「うっ♡うっ♡ふっ♡っ♡くっ♡くっ♡」

「くっくくくっ♡♡♡」

「う、あ……!」

万力の如く締まる膣内。

絡まるヒダが、子宮内へ吐き出せと誘う。

「ぐう……！っ！」

「お、お、お、ほおおおおっ♡」

絶頂中の膣から分身を抜ける瀬戸際まで引く。

繋がった結合部から大量の雫が床に溜まる。

「はあっ……！はあっ……！」

「~~~~っほ♡」

揺れる雌尻を、また、掴み——

「フン!!!」

「あへっ!♡」

奥を指し、ライザが間抜けな声を漏らした瞬間、射精した。

「い、ひゃあ♡きっ♡~~~~っ♡あっ♡せえし♡きっ♡」

「お、お、お、おおっ♡♡♡おほっ♡」

1つ間を置き、射精を認識した。

「やつ♡やけ、ちやうう♡おくがあ♡あいつ♡」

睾丸が震え、身体を走る快感が子種と共にライザに伝わる。

「あっ♡す♡ご♡っ♡♡♡イクうっ♡イクっ♡♡♡」
「っ!!!」

「あゝゝゝゝゝゝ♡♡♡♡」

互いに結合部を押し付け合い、一滴の無駄もなく貪欲に相手を欲する。その姿はまさに、獣と言っても過言ではないだろう。

「はっ♡ど♡ぶ♡ど♡ぶ♡き、てえ♡」

抜けてゆく感覚と注ぐ感覚。

自分が今、ライザの子宮を満たしている事実が最高の興奮材料になる。

「んっ♡ほあ……♡」

吐精が穏やかになってゆく。

尻を掴んでいた手を離すと、赤い跡がクッキリとついていた。

「あっ……♡んう♡」

離れた手で下からライザのお腹に触れる。

ピチピチと跳ね躍る精子達の鼓動を薄く感じる気がした。

アトリエの寝室に置かれたベッド。

「ちゅぷ♡んじゅ♡ぐぷっ♡」

その上で、俺達はシックスナインの体勢で互いの性器を愛撫していた。

「じゅる♡じゅるるっ♡んぱっ♡はむっ♡うう♡ん♡」

外はまだ明るい。

日差しが寝室を半は照らし穏やかな雰囲気なのに対し、影に隠れたもう半分は卑猥で、淫らな雄と雌が交じり合う。

「んっ♡ぢゅっ♡んあっ♡」

ライザが上で覆い被さり、俺は下で寝ながら肢体を楽しむ。

舌を膣に入れ、上向きに舐めあげれば甲高い嬌声が鳴る。

「そこっ♡やつ♡へんになるっ♡んん♡♡」

「ちゅぱ！イッても別にいいんだぞ？」

「うう~~~~♡あむっ♡♡」

「うわ……！」

やられっぱなしは嫌なのか実った果実で挟み込み、谷間から顔を出す息子にフェラを

してくる。

「んっ♡んっ♡ちゅ♡」

Gカップによるパイズリフェラは、いつもながら甘美な刺激だ。

「んんっ♡じゅりゅ♡ペろペろ♡」

「はっ、あ……っ!」

「んんっ♡」

向こうのペースに吞まれる前に、すぐさま秘裂に口をつける。

「んんんっ♡んぐっ♡ちゅる♡」

舐めたり吸ったりの応酬の証が、音となって反響する。

逸物が柔らかくも張りのある弾力に包まれ、不意にぬるりとした暖かな感覚が襲い掛かる。

「ちゅば♡ちゅっ♡じゅるじゅ♡ちゅ♡」

尿道が引つ張られる。

「ぢゅっ♡じゅびっ♡じゅびっ♡んれえ♡」

ムワア……と湯気と一緒に解放された肉棒をビクビクと跳ね、射精寸前に追い込まれた。

「ライザっ!もう、射る……!」

「あつ♡だすならこつち♡」

起き上がりながらこちらへ振り返り、自らの秘部を指で広げ、そそり立つ肉棒を当てる。

「んっ♡」

騎乗位に移り、股を広げながら手を俺のお腹に置き、ゆつくりと腰を下ろしてゆく。

「あゝ~~~~~♡♡」

コツンと亀頭が下から子宮口を突いた。

「んんっ♡はっ♡」

奥までズツポリと啜えたまま、前後にグラインド。

「んふ♡」

「うあつ……！動き、やばっ」

「う、んっ♡はあ♡」

ズシリと尻に重心を置き、右へ左へ揺らぐ。

時たま踊るように捻れば、予期せぬ刺激が股間から全身を駆け巡る。

「あ、ん♡ふふっ♡うりうり♡」

「うくっ……この……！サキュバスかお前は……！」

小さく上下に動いたかと思えば絞るように膣が収縮し、また腰を回す。

「あふ♡サキユバス、つてなに?」

タンタンとリズムミカルに腰を下ろすライザ。

お尻の肉がくつつくたび、ひしゃげてぶるりと波を打つ。

「空想上の、生き物……! 男の精を絞り取って殺すんだと……!」

「ふうん♡ん♡」

喋っている間も、性行は止まらない。

「もし、いるならっ♡ひう♡会って、みたいっ♡なっ♡」

「なに、言っ……!」

「それで、さ♡目の前で、あっ♡○○とっ♡セックスして、見せつけるのっ♡」

「……あ?」

タンっ♡ タンっ♡ タンっ♡ タンっ♡

「あたしの、ほうが♡えっちだっ♡見せ、つけ、るっ♡」

タンっ♡ タンっ♡ タンっ♡ タンっ♡

「○○の♡おちんちんみるくっ♡びゆる♡ってして♡」

パチュっ♡ パチュっ♡ パチュっ♡ パチュっ♡

「っふ♡それでね♡それでねっ♡」

「赤ちゃんができるとこ♡♡♡見てもらうんだあ♡♡♡」

「……この」

「はあ♡あん♡」

両手を揺らし、跨っている下半身……骨盤に添える。

「スケベ女め!!!」

「んっ♡♡♡ほっ♡♡♡おほっ♡♡♡」

「こんの!エロライザ!」

「だめっ♡あつ、いい♡」

ガツチリ捕らえたままライザの身体を下ろし、それに合わせて突き上げる。

「そんなに!欲しいなら!いくらでもっ、くれてやらあああ!!」

「ふっ♡ふかい♡しゅき♡」

「射る、ぞっ!」

「らしてえ♡びゅうって♡あっ♡ちんちんびゅっしてえ♡」

甘く、誘う雌声で情欲が煽られる。

2回目の限界も近かったせいも、必然的に抽挿が加速した。

「っ！受けと、れえ!!!」

噴火の如く、マグマが噴き出す。

「き、たあ♡♡♡」

彼女が望んだ子種がピチピチ泳ぎまわり、オーガズムを生む。

「あぁ♡♡♡あ♡っ♡せえ、しっ♡♡しきゅ、う♡」

震えながら、快感に打ちひしがれるライザ。

絶頂に吞まれつつも、喜びの喘ぎを絞り出す。

「っ♡♡♡はぁ♡……♡♡♡おなか、たぶたぶになっちゃう♡」

時計の針はまだ、昼間を指している。



日が落ち始めた。

「お♡っ♡う♡っ♡」

そんなことも気にせず、俺達はセックスを続ける。

昂った劣情は収まることを知らず、気づけば自然とライザを押し倒して重い一撃を連発していた。

「ぐ、くっ♡りやめ♡ちんちんっ♡もう♡つかないでっ♡はおっ♡」

「ふーっ！ふーっ！」

「ぎゃっ♡」

もう知らない。聞こえない。

頭の中は目の前の雌に種付けすることしかない。

「とぶう♡とんじやうう♡しんじや、ううう♡ううう♡」

種付けプレスで組み敷かれ、痙攣する。

「いっでる♡も、うっ♡とみやっ♡てえ♡」

「っ！っ！っ！」

「おっお おおお♡♡♡♡♡♡♡♡♡おっうっうっ♡♡♡♡♡」

腰の動きと汚い喘ぎが止まらない。

イキながら吠え過ぎて、喉が枯れてしまいそうだ。

「ひゅー……!! うくっ♡」

「まだまだあ!!!」

「こっ♡ひ、え♡うひっ♡」

「ドスケベ! この! ドスケベが!」

考えるよりも先に口がまわり、身体が動く。

「孕め! オラア!」

「ふお♡ぐううううっ♡ん♡っ♡」

「子宮で! 孕め!」

「んやあ♡あ♡っ♡あ♡っ♡」

「錬金窯で! 精子を! 受精しろ!」

「~~~~~♡♡♡」

子宮という錬金窯にチンコを打ち付ける。

尿道を掻き分けて子種がせり上がってくる。

「はあっ♡あ♡あっ♡ちんぼじるう♡きちやうう♡」

「イクぞお!!! ウ♡ッ!!!」

びゅぶゆっ♡

「ふお♡♡♡」

「……………つふ、うー！」

果てしなく長い射精が終わるまで絶頂姿勢のまま2人して固まり、気づけば意識が途絶えていった。



「……………んあ？」

微睡みから目が覚める。

時刻は既に真夜中になっているようだ。

身体が重い。

「うーん……………うあ？」

何故か股間が暖かく心地良い。

身体をのそりと起こし、何が起きてるのか見てみると……………。

「……………何してんだおい」

「ちゅぱっ♡……………えへへ♡」

いや、えへへじゃなくて。

可愛いなくそっ。

「まだおつきいままだったから、はむ♡ひやぶりたく、て♡ずりゆう♡」
「お前なあ……!」

「ぢゅぷる♡んぱっ♡」

唾液でコーティングされた息子がテラテラと光沢を放ち、存在感が強調される。

「ねえ♡」

顔の近くで膝立ちになり、自分から秘部を広げた。

「もっ♡しよ♡」

クパア……と開いた膣からは、射しまくったザーメンがぼとぼと垂れてくる。

「はやく♡はやく♡」

「っ!」

「ちんぽ♡はやくう♡ちんちんいれてよお♡」

心音が一気に跳ね上がる。

頭の中が再び欲にまみれ、力づくでライザを押し倒す。

「——あん♡」

その後、夜明けを迎えるまで雄と雌は盛りあつた。